

# 太平天国の武昌占領とその影響

菊池秀明

はじめに

近年の中国史研究における大きな変化は、新史料の発見によって歴史の具体像が明らかになった点であろう。とりわけ清朝政府の公文書である檔案史料の公開は、時代の要請に基づいた一面的な歴史認識の見直しを可能にした。太平天国運動（1850–64年）についても今こそ「革命の先駆者」あるいは「破壊者」といった従来の評価を超えて、客観的な立場からその実像を解明する必要が高まっている。

かつて筆者は太平天国の生まれた原因が広西移民社会のリーダーシップを握った科挙エリートと非エリートの対立にあり<sup>1)</sup>、清朝の統治が行きづまる中で人々は「理想なき時代」を乗り越える処方箋を熱望していたと述べた<sup>2)</sup>。また筆者は上帝会が慎重に準備を進め、各地の会員を糾合して金田団營を成功させたこと<sup>3)</sup>、永安州時代の太平天国は楊秀清のイニシアティブを強化しながら王朝体制のひな形を整え、広東信宜県の凌十八はその慎重な行動ゆえに太平軍と合流できなかったことを指摘した<sup>4)</sup>。

さらに筆者は広西北部、湖南南部を転戦した太平天国が不寛容を特徴とする強い宗教性を帯びており、工作員を派遣するなど積極的な動員工作によって各地の反政府勢力を糾合したことを明らかにした<sup>5)</sup>。また1852年9月から81日間にわたった太平軍の長沙攻撃は失敗したが、清軍も一度は太平軍を逆包囲しながら勝利を得ることは出来ず、指揮が統一されなかったためにその北進を許したことを指摘した<sup>6)</sup>。

本稿は長沙を撤退した太平軍が岳州を占領し、1853年1月に揚子江中流域の重鎮である武昌を陥落させた過程を考察する。この時期における戦局の変化は、太平天国が南京へ進出して全国的な運動へ発展するうえで決定的な影響を与えた。また岳州と武昌の陥落は多くの体制派知識人に衝撃を与え、反乱拡大の原因とその鎮圧方法をめぐる多くの議論を生み出した。さらに武昌で太平天国が試みた様々な措置は、南京進出後に実施された社会制度のひな形となるものだった。

しかし太平天国史において重要なこの時期に関する先行研究としては、簡又文氏<sup>7)</sup>、鍾文典氏<sup>8)</sup>の通史的研究および崔之清氏<sup>9)</sup>の軍事史研究などが数えられるに過ぎない。その最大の原因は当該時期の檔案史料が宮中檔、軍機處檔共に台湾に所蔵され、大陸の研究者が活用する条件がなかったことに求められる。そこで筆者は1999年から台北の国立故宮博物院を訪問し、同図書館所蔵の檔案史料を系統的に整理、分析した。また2008年、2009年に

はイギリスの National Archives でいくつかの新史料を発見した<sup>10)</sup>。さらに中国第一歴史檔案館編『軍機処奏摺録副・農民運動類』および同館編『清政府鎮圧太平天国檔案史料』<sup>11)</sup>を併せ用いることで、この時期の太平天国の歴史を出来る限り具体的に描き出してみたい。それは太平天国史を階級闘争史の枠組みから解き放ち、新たな全体史を構築するための一階梯になると思われる。

## 1. 太平軍の洞庭湖進出と岳州占領

### (a) 太平軍の北上戦略と洞庭湖進出

11月30日に長沙を撤退した太平軍は北西に進路を取り、翌12月1日に寧郷県を占領した<sup>12)</sup>。3日に先鋒隊は益陽県を陥落させ、後衛部隊は寧郷県近くで追撃してきた向榮の清軍と遭遇した。4日に向榮が蒼水鋪に到着すると、益陽県城の資江沿岸にはすでに太平軍が浮き橋を作って防禦を固めていた。向榮は対岸の陸賈山に陣を敷いて太平軍と戦ったが、副将紀冠軍など数百名の死者を出して敗北した<sup>13)</sup>。7日に太平軍の先鋒隊は洞庭湖への入口にあたる臨資口(林子口)に到達した。同じく7日に主力は蘭溪市で向榮の派遣した総兵郭仁布の軍を破り、翌8日に西林港へ向かった<sup>14)</sup>。

わずか数日の戦いであったが、局面は大きく変化していた。その最大の理由は太平軍が益陽県で数百隻の船を獲得し、水路を用いて洞庭湖へ進出する可能性が開けたことにあった。元々清朝は長沙の太平軍が南北へ進出することを防ぐために、往来する船舶を臨資口、湘陰県の土星港などに停泊させていた。益陽県でも船が「雲集」し、これを「駆遣しようにも地なし」<sup>15)</sup>すなわち撤去できない状態だった。そして太平軍が益陽県に到達すると、「河内の船隻はおよそ数百艘、知県があらかじめ移動させていなかったために、ことごとく賊に奪われた」<sup>16)</sup>とあるように全て太平軍の手中に落ちた。また蘭溪市でも「沿岸で多くの空船を奪い、水陸に分かれて行軍」<sup>17)</sup>したという。

大量の船を獲得したことは、太平軍の進撃方向を変えさせた。李秀成によると、長沙を撤退した当初の太平軍は「益陽県から洞庭湖の沿岸を常德へ向かい、河南を取って家となす」<sup>18)</sup>とあるように、洞庭湖西岸を経由して北上する戦略を持っていたという。これは徐広縉の上奏からも確認でき、「逆匪はすでに寧郷に至ったが、捕らえた犯人の供述によれば、常德へ向かおうとしているという」<sup>19)</sup>とある。だが水路による行軍が可能になったことで、洞庭湖から東北へ進出する可能性が一気に開けた。この時の太平天国首脳による方針変更の様子を、李濱『中興別記』は次のように描いている。

はじめ賊が長沙から西へ向かった時、寧郷から洞庭〔湖〕を廻ってしばらく常德を取って根拠地にしようと考えた。船舶があまり備わっていなかったため、なお軽々しく湖を渡ろうとはしなかったのである。だが官軍が益陽、湘陰県を守るために、川や港で商民の船が航行するのを止めると、それらはことごとく賊の所有となった。すると楊秀清

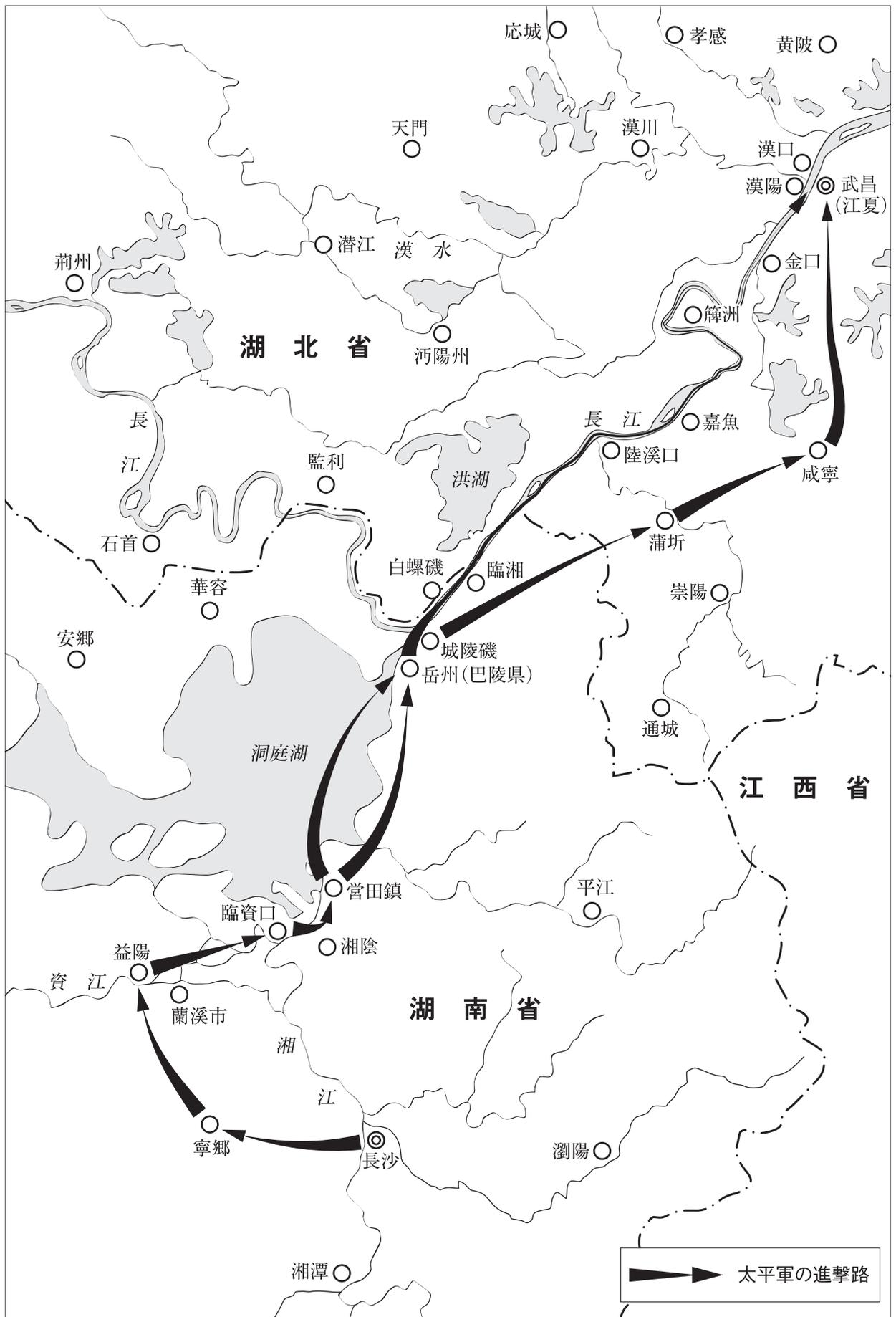


图1 太平天国的武州·武昌进出图

は大いに喜び、洪秀全らに言った「これは天父の賜ったものだ。天に逆らうことは不吉である。まさに進撃方向を変えて洞庭湖に出で、岳州をめざすべきだ」と。これによって賊は水陸で助け合うようになり、益々抑えることが出来なくなった<sup>20)</sup>。

李濱の記載が何を根拠としたものかは不明である。だが『天条道理書』は長沙攻撃が失敗した理由を天父の暗黙の導きによるとしたうえで、「もし長沙に長く留まっていたら、益陽などの河川の船戸は妖魔の脅しによって遠くへ遁れていたであろう。そうなったらわが百万の雄師はどうやって船を獲得し、流れに沿って武昌を破ることが出来ただろうか<sup>21)</sup>」と述べている。ここから見る限り進撃ルートの変更は、天父下凡を行った東王楊秀清のイニシアティブによって決定されたと見るべきだろう。

それでは戦局を大きく変えたこの時期に、清軍はなぜ適切な措置を取ることが出来なかったのだろうか。すでに8月27日に湖北巡撫常大淳はみずから岳州を視察し、洞庭湖対岸の湘陰県から「順風に帆をあげれば半日で〔岳州〕郡城へ到達」出来ることを知った。そこで彼は巴陵県の紳士である呉士邁に漁勇2,000名、漁船500隻を組織させ、訓練を行わせた<sup>22)</sup>。また洞庭湖口、土星港、臨資口などに関所を設け、川底に石を積んだ船を沈めたり、杭を打ち込んでバリケードを築かせた<sup>23)</sup>。

つぎに新任の提督雙福と交代で北京へ向かう予定だった湖北提督博勒恭武（満洲旗人）は、前塩法武昌道の王東槐と共に兵1,600名を率いて岳州を防衛するように命じられた<sup>24)</sup>。また太平軍が湖北荊州に進出しようとしているとの情報が入ると、岳州の対岸に近い監利県の白螺磯に駐屯していた荊州將軍の台湧は長江上流の沙市に移って洞庭湖西北の守りを強化した<sup>25)</sup>。さらに湖南で肥子船に乗った「盗匪」が横行しているとの告発がなされると<sup>26)</sup>、湖南巡撫駱秉章は実態の調査を行った<sup>27)</sup>。寧郷県知県の齊徳五も太平軍の長沙攻撃中に蠢動した「土匪」を弾圧し、団練を動員して不穏分子を肅清したという<sup>28)</sup>。

ところが太平軍が接近すると、益陽県の城外に駐屯していた清軍はいち早く逃亡し、知県陳応台もその後に続いた<sup>29)</sup>。臨資口に築かれたバリケードも12月9日に太平軍が「民人を脅逼して幫拆<sup>30)</sup>即ち人々を動員して撤去してしまい、土星港に駐屯していた呉士邁の漁勇は「人情が固くなかったために、賊が至ると軍は潰えた<sup>31)</sup>」とあるように戦わずして敗走した。さらに太平軍は湘陰県城を攻めたが、外委楊載福（即ち楊岳斌、後に曾國藩の推薦によって福建陸路提督となり、湘軍を率いた）の抵抗に遭い、総兵常禄と都司張国樑の援軍が到着したために攻略をあきらめた。そして12月11日に營田鎮から水陸両軍に分かれて岳州へ向かったという<sup>32)</sup>。

## (b) 太平軍の岳州占領と清軍の敗因について

いっぽう岳州では迎撃体制が全く整っていなかった。常大淳の上奏によると、博勒恭武は12月13日未明に太平軍が府城から15キロに接近したことを知り、兵800名を率いて五里

排に向かったところ、太平軍 2,000 人余りと遭遇した。戦いが始まると、東門から火の手が上がり、太平軍の騎兵、歩兵が後方から突撃してきた。挟み撃ちとなった清軍は「抵抗出来なくなり、ついに潰え散じた」<sup>33)</sup>とあるように総崩れとなり、博勒恭武も負傷して武昌へ向けて撤退したという。

また徐広縉の上奏によれば、13日に大荆に到着した向荣は太平軍が岳州へ向かったことを知り、博勒恭武に「冷静に厳しく防衛に努められたい。一、二日持ちこたえられれば大軍が到着する。くれぐれも為すところを知らずに驚き慌てることのなきように望む」という書簡を送った。しかし14日に岳州の新口鋪に到着して見ると、府城はすでに陥落していた。また巴陵県から脱出した者の供述によれば、「岳州の官員は初二日(12月12日)にすでに城を出ており、初三日(12月13日)には[巴陵]知県もまた城を出た。昼時になって賊匪が三股に分かれて湧くように現れると、官兵は全て潰え散じた。城門は大きく開かれ、守る人間がいなかったため、賊匪は城内へ進駐した。城内の火薬、大砲および備蓄された食糧など一切はみなすでに賊のものとなった」<sup>34)</sup>という。

岳州陥落の知らせを受けた清朝は、博勒恭武が挟み撃ちに遭ったのは「匪徒が府城へ入り込み、賊のために内応」したためであり、岳州府知府廉昌、巴陵県知県胡方毅、参将阿克東阿らが警戒を怠っていたことを叱責した<sup>35)</sup>。また徐広縉の上奏が届いた12月27日の上諭では、廉昌ら3人について「平日は毫も準備がなく、事変にあっては城を棄てて逃げるなど、この良心の失いぶりは実に情理の外である」<sup>36)</sup>と非難して調査を命じた。そして徐広縉が「これらの文武官員は賊がいまだ至らぬうちに先に潰えたのであり、実にいまだ兵を率いて迎撃したという話を聞かない」<sup>37)</sup>と報告すると、廉昌と胡方毅は「(城を)固守せずに棄て去った」罪によって死刑を命じられた<sup>38)</sup>。また阿克東阿については武昌陥落後に湖広総督となった張亮基によって一度は戦死と報じられたが、その後負傷して江蘇海州に潜伏していたことがわかり、自首したところを殺された<sup>39)</sup>。

さらに咸豊帝は博勒恭武についても、その負傷が「虚捏」ではないかと疑って調査を命じた<sup>40)</sup>。すると徐広縉は彼が12日に太平軍の岳州接近を知るとすぐに城を出たという証言をもとに、他の官吏と同じく逃亡したのは「すでに疑義のない」<sup>41)</sup>ことであると報じた。武昌到達後に漢川県および江蘇で傷の治療をしていた博勒恭武は、徐広縉の上奏に怒った咸豊帝が彼の処刑を命じたことを知り、満洲旗人の名誉を傷つけた汚名をそそぐため密かに北京へ戻ったところを捕らえられた。彼は12月13日の戦いについて「もし戦っていないと言うなら、死んだ賊や亡くなった兵三百余名は誰に殺されたというのか」とあるように冤罪を主張した。また彼は「まさに進攻しようとした時に、郷勇が城を献げてしまい、東門から数万人の賊匪が一斉にくり出して背後を襲った」<sup>42)</sup>と述べており、岳州城内で晏仲武(巴陵県人)らによる内応工作があったことを示唆している。

結局のところ岳州陥落の責任は守備を担当していた文武官員に負わされたが、清軍の実際の敗因はどこにあったのだろうか。そこで手がかりとなるのは12月22日に出された陝西

道監察御史王茂蔭（安徽歙县人）の上奏である。彼は次のように述べている。

湖南の賊匪は十月十九日（11月30日）の夜に紛れて奔走し、寧郷県へ逃れたという話であったが、署總督の徐広縉は將兵を派遣して常德、宝慶へ入るのを防ごうとした。常德は商人が集まる場所であり、彼らが羨む可能性は否定できないが、宝慶は広西へ退く路線に当たり、広西から来た彼らがその地の富がすでに尽きていることを知らない筈はない。私は彼らが寧郷から沅江に迫り、洞庭湖へ進出して岳州を窺うのは間違いない筈と考えた。

徐広縉が張国樑らに兵四千名を率いて長沙の西北へ向かわせたのは、賊匪に突破させないためであった。しかし私の聞くとくでは岳州の守備兵力は僅か二千名であり、しかも湖南にいる総督、巡撫などの大官は決して岳州が重要だとは考えていない。彼らは湖北提督の博勒恭武が岳州に駐屯したのも厄介なことだと感じており、湘陰県で発生した土匪の騒ぎを博勒恭武が鎮圧した時も、湖南の文武官員は誰一人として手助けをしなかったという。

しかも捕らえられた土匪の供述によると、彼らの頭目である晏五、別名晏和尚は有名なアヘン商人であり、会匪と息の通じた人物である。八月に彼は長沙にあった賊の陣地を訪ね、偽旗や銀を与えられて、湘陰県で賊を出迎え、食糧や火薬を強奪しようと図った。このため岳州府城では人々がごとごとく逃げ出したのであり、もし湖北の兵勇が弾圧しなかったら、岳州はどうなったかはわからない。数十万の兵糧と火薬が奪われたばかりか、現在賊匪は北へ向かっており、岳州の守りが手薄だと知って侵入すれば、東は武昌、西は荊州へ行くことが可能となる……。しかも武昌の守備兵はたったの数百名であり、大変憂慮すべきである。もし岳州が失われれば、湖北は必ずや激震となる。さらに彼らが長江を下ることになれば、水師も兵糧もないのである<sup>43)</sup>。

ここで王茂蔭は太平軍の北進を予想し、その南下に備えた徐広縉の措置が誤りだったと述べている。また湖南の文武各官が長沙の防衛を優先したために、湖北の入り口となる岳州については無警戒であること、湖北提督の博勒恭武が岳州に駐屯したことにも冷淡な反応を見せ、「晏五」すなわち晏忠武が太平天国に呼応する動きを見せても真剣に対応していないと批判した。そして岳州が陥落すれば、武昌の守りは更に手薄であり、太平軍が長江を東へ向かえば事態は收拾がつかなくなると警鐘を発している。

こうした危機感は長江流域出身の知識人に共通して見られた。前任刑部主事の王柏心（湖北監利县人）は「南楚の將吏には賊をほしいままに東下させたいという意がある」とあるように、湖南の地方長官たちが太平軍の長江流域への進出もやむなしと考えていると指摘した。また彼は水陸の要衝である岳州に2-3万人の兵力を置くべきであると述べたうえで、「岳州を守れなかったら、武昌は嬰城となって自ら固めることになるが、これは坐困であっ

てよい方策とは言えない<sup>44)</sup>とあるように、岳州が陥落すれば武昌は孤立して籠城せざるを得ないと指摘した。

さらに実際に岳州が陥落すると、咸豊帝は「岳州、湘陰一帯は南北両省の要隘であり、朕は早くから賊匪が追いつめられれば、必ずこの道を通って逃げるだろうと考えた。そして九月以来しばしば諭旨を降して該大臣らに精銳を派遣し、協力して防衛するように命じていた。先の徐広縉の上奏にも派兵して賊が北進する道を防ぐとあったのに、どうして博勒恭武が賊と戦った時に、湖南からの追撃の官兵が前後から挟み撃ちにできなかったのか<sup>45)</sup>とあるように、太平軍の北進を予防せず、追撃の兵も送らなかったとして徐広縉を叱責した。そして12月18日の上諭で彼を革職留任の処分とした<sup>46)</sup>。

これらの批判に対して徐広縉は、太平軍を追って東へ向かう筈の綏靖鎮総兵和春、鎮遠鎮総兵秦定三らが彼の命令に待たずに南進し、岳州の救援についても「故意に遅延して、賊を北へ逃れさせた」と告発している。また彼は「向荣だけはなお愧奮を知り、回り道をして前進したが、その他の将校たちは均しく遅延と観望を免れなかった。もっとも恨むべきは福興の率いた広東兵であり、さきに強力と言われていたが、この提督が率いるようになってからは悪習に染まり、あれこれ理由をつけては前に進もうとしなかった」とあるように、徐広縉自身が起用した新広西提督福興率いる広東兵も役に立たなかったと弁明した。そして彼は自分の「威望が乏しく」、部下が従わない現状では「束手無策」にならざるを得ないと認めると共に、代わりの「重臣」を派遣するように求めた<sup>47)</sup>。

だが岳州の陥落に関する限り、その主たる原因は清朝政府の判断の甘さにあった。太平軍が長沙を囲んでいた9月24日に、咸豊帝は「長沙に少しでも疎虞があれば、湖北はさらに防堵し難い<sup>48)</sup>」と述べて岳州の博勒恭武に長沙の救援を命じた。10月2日に博勒恭武は先遣隊520名を進發させたが、その直後に湖北巡撫羅繞典から「現在賊匪数百が船隻を擄掠し、真っ直ぐに下游に下って岳州を攻めるといふ説があり、厳密に防衛されたい<sup>49)</sup>」という知らせが届き、長沙への移動は中止となった。しかしこの上諭を知った元兵部主事王家璧（湖北武昌県人）は、手紙の中で「憂うべきは岳州が北省の咽喉であり、提督の博勒恭武は現在長沙の救援を命じられたが、もし賊が隙に乗じて来襲すれば、事態はどうなるかわからない。もし岳州を失えば、彼らが北は荊州へ、東は夏口へ向かうのは必然である。わが省は現在防禦に努めていると言うが、いまだ力を發揮できるかどうかはわからない<sup>49)</sup>」と述べている。彼は清朝が岳州の重要性を理解しておらず、湖北の防衛もおぼつかないと考えていたことが窺われる。

いっぽう常大淳が湖北防衛のために派遣を求めた安徽兵1,000名は、江西の守りが手薄であることを危ぶむ両江総督陸建瀛の意向もあって出發が遅れた<sup>50)</sup>。また10月中旬に常大淳は、岳州で捕らえられた太平軍の密偵から「逆匪は現在長沙に二万の衆がおり、三股に分かれて湖北を攻めようとしている」という供述を得た。そして「逆匪はややもすれば数万と称しており、もし彼らがこれらの地へやって来たら、実のところ千や二千の兵を要所に配置し

でも防げるものではない」とあるように、深刻な兵力不足を指摘した。そして武昌へ到着した安徽兵 400 名を岳州へ派遣すると共に、長沙の清軍から 2,000 名を割いて岳州へ向かわせるように要請した<sup>51)</sup>。

このように考えると清軍が岳州を失った第一の原因は、中央政府が戦局の変化に振り回され、長期的な展望に基づく戦略を打ち出せなかったことに求められよう。1853 年 1 月に清朝は「遅延観望」の罪で福興を革職、和春らを革職留任の処分にした<sup>52)</sup>。また陸建瀛と元協辦大学士・陝甘総督の琦善に欽差大臣の関防を与え、長江下流域と河南方面の防衛に当たさせた<sup>53)</sup>。さらに咸豊帝は 1 月 4 日の上諭で「朕は即位して三年、いまだ四方を安んじてわが民を楽に暮らさせることが出来ない。宮中深くにあって自ら省みるや、どうして寝食が落ち着かないだけで止まるるか<sup>54)</sup>と告白している。若き皇帝にとってこれらの難局に的確な指示を出すことは荷が重かったと言うべきかも知れない。

## 2. 太平軍の武昌攻撃と清軍

### (a) 太平軍の漢陽進出と清軍の防衛体制

12 月 13 日に岳州を占領した太平軍は、すぐさま次の作戦にとりかかった。まず 16 日に水軍は臨湘県の城陵磯を奪い、同日中に陸路の軍も岳州を出発した<sup>55)</sup>。その後水軍は長江を下って湖北嘉魚県の陸溪口に入り、武昌から 30 キロの江夏県金口鎮に到達した<sup>56)</sup>。また陸路軍も湖北省内に入り、19 日に蒲圻県を、21 日には咸寧県を占領した<sup>57)</sup>。これらの動きについて常大淳は「客商の米油などを運ぶ船を奪い、湖南臨湘県の城陵磯から陸続と湖南へ向かった。監利県の楊林磯、嘉魚県の瀘溪口、箏洲から流れに順って真っ直ぐに下ったが、およそ船は四、五百隻、賊衆は数万いた」と述べている。この時太平軍の兵力は「土匪を勾結し、平民を裹脅<sup>58)</sup>」することで増加していたと考えられる。また陸路の軍も数千人の規模で、「馬匹が甚だ多かった」ために行動は迅速であった。

これに対して清軍の動きは相変わらず緩慢だった。12 月 15 日に向荣は岳州郊外に到着したが、味方の到着を待ったために太平軍退出後の 17 日ようやく府城を奪回した。また太平軍の水軍が出発したことに焦った向荣は、16 日に河北鎮総兵常禄、鄖陽鎮総兵王錦繡の率いる湖北兵、雲貴兵 3,200 名を「賊の前方に回り込むことを期」して武昌に向かって進発させた<sup>59)</sup>。だが彼らは「もとより力のある勇将ではなかった」ために、途中太平軍と遭遇して敗北し、21 日に武昌に到着した時には 1,000 名余りに減っていた<sup>60)</sup>。また革職処分を受けた福興らの広東兵は後方にあり、四川提督蘇布通阿の軍はさらに遅れていた。徐広縉は太平軍が船を奪ったために、清軍は徒歩で行軍せざるを得なくなり、「度々厳しく催促したものの、およそいまだ迅速に進むことが出来ない」と報告している。

さらに追撃する清軍の行く手を阻んだのは、晏仲武らによる攪乱工作だった。12 月 26 日に「土匪晏仲武は長髪の逆賊と通じ合い、二千余人を招いて沿途劫掠し、兵の糧道を阻もうとした<sup>61)</sup>とあるように、軍事物資の強奪を図って副将巴圖らの輸送部隊を岳州郊外の新牆

に囲んだ。徐広縉は副将鄧紹良らの兵 1,000 名と候補知県江忠源の楚勇を派遣し、12 月 30 日に両軍は新牆で交戦した。敗北した晏仲武らは間もなく捕らえられ、1848 年に上帝会に入って「洪逆の偽職」を受けていたこと、彼らが土星港で呉士邁の漁勇から銅砲を奪い、船を準備して太平軍を迎えたことが明らかになった<sup>62)</sup>。だがこうした呼応勢力の弾圧に追われた清軍は、追撃のスピードを上げることが出来なかったのである。

いっぽう武昌を守る清軍の動きはどうであろうか。1852 年 6 月に武昌城内で「天徳王」による反清の告示が発見されると、8 月に湖北巡撫龔裕は防堵総局を設けて紳士たちに団練 1,400 名を組織させた<sup>63)</sup>。だが 20 万両の巨費を投じた軍備強化は「有名無実」であったため、岳州陥落後にこの事実を知った常大淳は担当者であった候補同知の周祖賢を更迭した<sup>64)</sup>。また武昌省城の周囲は 10 キロに及んだが、正規兵は陝西巡撫張祥阿らが派遣した救援の軍を合わせても 3,000 名に過ぎなかった。常大淳が「城壁を守るのにも足りず、どうして弾圧に備えられよう<sup>65)</sup>と指摘したように、兵力は明らかに不足していた。

このため提督雙福は「主客の兵は僅か五千しかおらず、兵が少なければ密集させるべきである。外地の防衛を撤してことごとく城内に住ませ、かつその逃亡を防ぐ<sup>66)</sup>と主張して、各要所に配置されていた兵を呼び戻して省城の防衛に専念する戦術を取った。また常禄と王錦繡の兵が到着すると、湖北按察使の瑞元は彼らを城南の要地である長虹橋、城東の雙鳳山に駐屯させるように求めた。だが雙福はこの提案をしりぞけて彼らを入城させたため、結果として漢陽と漢口は無防備な状態に置かれたという<sup>67)</sup>。

この雙福の決断については、当時から「河岸の防衛を撤して専ら城を閉ざして守ろうとしたため、城外はみな賊となった<sup>68)</sup>とあるようにその弱腰を批判する声があった。また簡又文氏は向榮の援軍が到着しても呼応する兵がおらず、内外の連絡が絶たれたために武昌は陥落したと述べており、城外に守備兵を残さなかったことが敗因だったと見なしている<sup>69)</sup>。これに対して崔之清氏は全軍をあげて籠城することは軍事的な常識から見れば確かに誤りだが、この時太平軍と清軍守備隊の兵力には大きな隔たりがあり、清軍将兵の戦意が乏しかった現実からすればやむを得ない選択だったと主張している<sup>70)</sup>。

じじつ武昌陥落後に湖北撫轅巡捕廖慶謀らが提出した会稟によれば、常禄らの軍は「帳房器械を全て失<sup>71)</sup>って武昌へ着いており、独立した一軍として行動できる状態ではなかった。また岳州の城陵磯、監利県の楊林山などの要所に配置されていた清軍は「賊船が一たび至るや、すぐさま潰え散じた<sup>72)</sup>とあるように太平軍の接近と共に壊滅しており、兵の逃亡を防ぐことは先決問題であった。さらに廖慶謀らは次のように述べている。

十一月初五日（12 月 15 日）に岳州府城が初三日（12 月 13 日）午刻に失陥したと聞くと、巡撫〔常大淳〕と提督〔雙福〕はこの日兵勇を集めて城壁に登って守備につかされた。また総局に命じて武勝門外の塘角にいた石炭、米の運搬船を全て停止させ、物資を購入して城へ運ばせようとした。

初六日（12月16日）辰刻に斥候の者が「賊匪はすでに城から六十里の金口大金山に至り、放火して民家を焼き払っている」と報じた。私〔廖〕慶謀はすぐに巡撫の命令を受けて城上へ赴き、九つの門を閉めさせた。巳刻に壮勇を率いた委員である武昌府経歴の黄達、漢陽府経歴の呉経采が金口より戻った。そこで彼らに尋ねたところ、命令を受けて南勇四百名を率いて武昌へ撤退したが、出発時に火を放ったのであり、賊匪が民家を焼いたのではないことを初めて知った。

巡撫はすぐに九つの門を開かせたが、この日住民が次々と脱出しようとした。巡撫は避難を禁止する命令を出し、荷物を持って城を出ることを許さなかった。だが城門は出入りする人々でごった返し、踏み倒されてケガをする者も少なくなかった。また委員を派遣して城壁の外側にある民家を一丈分ほど壊させた。初七、八日（12月17日、18日）になっても民家は壊し終わらなかつたが、米五百石を城に運び込んだ。

初九日（12月19日）寅時に斥候が戻り、賊匪の船はすでに嘉魚県の箏洲に至ったと報じた。巡撫と提督は共に保安門に登り、土で九つの門を全て塞ぐように命令した。また城外の家屋を全て焼き払わせた。この日漢陽府城と漢口鎮の住民、客商は避難してほとんど尽きた<sup>73)</sup>。

ここからは太平軍の接近について誤った情報が伝わり、城外へ脱出しようとする人々が殺到してパニックが発生した様子が窺われる。19日に城門が全て塞がれると、今度は「城外の老弱丁壮で賊を避けて入り、共に城を守ろうと願う者が、城を囲んで叫び声を上げたが、ついにこれを聞き入れなかつた<sup>74)</sup>とあるように、城内へ逃げ込もうとする避難民が閉め出された。また常大淳らは長沙攻防戦で太平軍が城壁に隣接する民家を拠点にしたことを知り、これを破壊しようとしたが、作業が進まないうちに太平軍接近の知らせが伝わり、城外の民家を全て焼き払うことになった。だが「城外のあちこちで火事の光が起きると、煙や炎が勢いよく立ち上り、太陽も赤く染まった。男も女も号泣し、川や湖に身を投げて死ぬ者もいた<sup>75)</sup>とあるように、この措置はかえって人々の動揺を煽ることになった。しかも武昌の商人たちは城外の店舗や住居を破壊から守るべく、寄付を募って土城を築き、ほぼ完成させていた。雙福の判断はこれら住民の努力をないがしろにするものであったため、「民はみな深く恨み、賊が隙に乗じて彼らを誘ったり、脅したりしたために、その勢いは益々盛んとなった<sup>76)</sup>とあるように、太平軍に協力する者も出たという。

城外の火災は数日間にわたって続いたが、12月19日に常大淳は壮勇2,000名を新たに募り、紳士たちの統率のもと城壁の守備に当たらせた。また城内のどの家でも夜中門外に灯籠をかがげ、夜通し警戒に務めさせた。だが人々の間では「城内の城壁に近い民家も壊される」という噂が広まり、「衆情は洶洶となり、勢いはかつ激変<sup>77)</sup>とあるように一触即発の状態になったという。つまり武昌の清軍は準備不足もさることながら、官民間の信頼関係を構築出来ないまま太平軍の進攻に対処せざるを得なかつたのである。

はたして12月21日夜に検点黄玉崑、指揮李開芳、林鳳祥、羅大綱らが率いる水路の軍は「三、四千隻」で漢陽の鸚鵡洲に到着し、翌22日に漢陽府城を攻撃した。大別山に駐屯していた河南兵400名はたちまち敗走し、太平軍は三方面から城を攻めた。そして「城内の兵勇は元々少なく、戦いになるとすぐに散じたため、賊はついに入城した」とあるように漢陽は占領された。この日漢陽水師營の船10隻が鸚鵡洲の太平軍に反撃を試みたが、しばらくすると退却して姿を消した<sup>78)</sup>。勢いに乗った太平軍は「百貨が山積」といわれた漢口鎮も占領して「商民の金銭、繪帛、米塩などをことごとく奪った」<sup>79)</sup>という。

12月23日に武昌省城の南にある長虹橋に陸路の軍「六、七千人」が姿を見せ、城東の洪山に陣地を構築した。その一部は長虹橋に砲台数カ所を設け、清軍の救援部隊を阻む構えを見せた。また太平軍は長江に浮き橋を作り始め、26日に浮橋は完成した。「賊匪は紛々と米や火薬、火砲を運搬し、洪山の賊營を助けた」とあるように、水路軍の運んだ物資が洪山の陣地に運び込まれて攻撃の準備が整えられた。さらに太平軍は洪山よりも省城の城壁に近い雙峯山、小亀山、紫金山に数十カ所の砲台を築いた<sup>80)</sup>。

#### (b) 太平軍の勢力拡大と武昌攻撃の開始

こうして太平軍は圧倒的な優勢のもとで武昌城外へ進出したが、彼らが勢力を拡大した原因は言うまでもなく船の獲得による機動力にあった。常大淳は次のように述べている。

長沙の賊匪が逃げ出した後、四川、湖南両路の商貨の米船は大挙して一斉に下り、共に岳州で逆匪によって奪われた。現在省城の上流十余里に停泊しているのは約数百隻で、みな砲位を備えている。川幅は広く城上から砲撃しても届かない。新しく作った砲船二隻も抵抗できず、火攻めしようにも近づくことができない。その撃沈されたものは多くが小さな船である。搭載してある兵器や食糧は甚だ充足しており、兩岸に橋を架けたので応援も便利である。わが兵は水路、陸路共に分断され、食糧の輸送も出来ない。必ず先に大小の賊船をやっつけてこそ、勝利を取めることができる<sup>81)</sup>。

ここからは太平軍が船舶を入手すると同時に、船に積まれていた多くの物資を獲得し、豊富な武器と食糧を擁していたことが窺われる。李秀成は「岳州を破ると呉三桂の器械を得て、これを船に乗せて真っ直ぐに湖北へ向かった」<sup>82)</sup>と述べており、船に搭載され砲の多くは清初に呉三桂軍が使用したものであったという。このことは『鏡山野史』からも確認することができ、「初七日（12月17日）に呉王の砲と火薬を掘り出し、岳州を出発した。千の船に勇将が乗り、兩岸に雄兵が歩を進めた。鞭や太鼓、銅鑼の音が鳴り響き、道には凱歌の音が響いた」と記している。またこの時湖南の客商たちは多くが漢口から帰ろうとしていたが、その途中で太平軍によって船もろとも捕らえられ、「千百の総官となった者が少なくなかった」<sup>83)</sup>とある。武昌で正式に編制された水營の総司令官である唐正財（湖南祁陽県人）

もこうした「船戸」の一人で、漢陽と武昌をつなぐ浮き橋を作った功績を認められて指揮（南京到達後は殿前丞相）に抜擢されたという<sup>84)</sup>。

だが同時に忘れてならないのは、勢力拡大の過程でも厳しく統率された太平軍将兵の行動だった。雷以誠は次のように指摘している。

この賊はもっぱら誘い脅すことに長けている。まさに一城に至り、一村鎮を通過するに度に、先に偽示を出して人々を安堵させる。もし食物を買う必要があれば、余分に金を払い、また住民の姓名を掲示して、銀錢や財産を差し出させる。だが厳密に勘定する訳ではなく、ただ与えさえすれば騒ぎを起こさない。もし土匪で機に乗じて住民から略奪し、賊兵でニワトリなどを盗む者がいれば、賊はかえってこれを斬首して見せしめとする。このため進軍先でわが兵が食物を買おうとしても誰も出てこないが、賊は逆に満腹して去る。

また各地で壮勇を招いて入隊させ、その家を記録しておく。小偽示の張られた場所では、兵があえて問わないばかりか、土匪も手出しをしない。その最も憎むべきは、賊は一つの場所に至るたび、専らアヘンを没収して、これを倍の値段で売り出すことだ。わが兵の中でアヘンを買いたい者がいると、その姓名を書かせて人を通じて送り届け、金は取らない。このため賊に誘い脅される者が日々増えて勢いは強くなり、わが兵は恐れてますます勢いがなくなる……。ついに主客が転倒して、人々は兵を仇と見なし、賊に恩を感じるようになるのである<sup>85)</sup>。

ここからは太平軍が厳格な規律を持ち、略奪を働いた兵士や呼応勢力を厳罰に処すことで占領地の秩序回復を図り、住民の信頼を獲得していった様子が窺われる。これは清軍とりわけ潮州勇との際立った差異であり、光緒『咸寧県志』も「粵匪が過境するや、東西関の廟宇はことごとく焼かれたが、幸い追っ手の兵が後方にいたため、いまだひどく害を受けなかった。だが十五、六日（12月25日、26日）に潮勇が至るや、蹂躪すること耐え難いほどで、一ヶ月余りも駐屯してようやく去った」<sup>86)</sup>と述べている。

次に注目すべきは地域の有力者に対して、「進貢」すなわち告示を出して一定の富を供出するように求めた点である。洞庭湖周辺の豊かな穀倉地帯へ進出したことで、以前のように徹底した財産没収をする必要がなくなったためと考えられるが、それは「騒ぎを起こさない」ことを期待して支持を表明する富裕層を生み出した。例えば岳州に住む捐納員外郎の張姓は「富は一郡に甲たり」という富豪であったが、太平軍が到着する前に使いを送って銀物、米穀を献げたという<sup>87)</sup>。また史料からは壮勇の中からも太平軍に加わる者が増えたことが窺われる。岳州で呉士邁が組織した漁勇はその例で、「巴陵の悪賢い者はひそかに晏氏〔仲武〕の党に入り、その善良な者も賊を憚って、〔呉〕士邁が募集をかけたと聞いてもひるんでしまい、あえて応じる者はいなかった。雇われたのは多くが湘陰の人で、巴陵の人で至

った者は多くが賊に用いられた」<sup>88)</sup>とあるように、ひそかに太平軍と気脈を通じた者が少なくなかったという。

さらに興味深いのは、こうした情勢の変化につれて人々の間に「兵を仇と見なし、賊に恩を感じるようになる」傾向が強くなったという点である。同じ時期に出された貴州道監察御史王之斌の上奏も「賊は遍く偽示を張り、秋毫も犯さず、人心を收拾するはかりごとをなしている。さきに湖南の州県を犯した時、民は土匪と官兵の搔擾に苦しんだ。ひとたび賊が至ると聞けば、みな門を開いてうやうやしく礼をする。たとえ略奪があっても、居民のうける害はなお浅い。だが土匪が賊の到着前に、あるいは潮勇が賊の撤退後に行った略奪は、ほとんど生きた人間を残さないほどだ。だから人々は兵勇と土匪を恐れるが、正賊を畏れないのである」<sup>89)</sup>とあるように、太平軍が行く先々で人心の掌握に努めた結果、住民たちは略奪の激しい清軍や地元の反乱勢力を忌み嫌い、太平軍に対して好意を寄せるようになったと指摘している。しかもこの種の現象は太平軍の通過した地域に限られなかった。1852年11月に江西瑞州にいたカトリック宣教師デラプレース (Dr. L. G. Delaplace) は、反乱軍鎮圧のために動員された清軍将兵の暴行や高額な税に憤った人々が太平天国の到来を待ち望んでいると報告している<sup>90)</sup>。清朝の強引な統治手法に失望した人々が太平軍に協力したのは、武昌だけの現象ではなかったことがわかる。

12月27日早朝に太平軍は深い霧に乗じて、省城の7つの門に一斉に攻撃をかけた。彼らはそれぞれの門に雲梯を数十架ずつかけたが、城上の清軍によって数百名の死者を出して撃退された。この勝利に喜んだ常大淳らは、兵勇1人につき銀1両の褒美を与えた。またこの日向榮の援軍が到着し、長虹橋の南で太平軍に攻撃をかけたが、すでに太平軍は武昌城外に残された土城を活用して防禦陣地を構築しており、「官兵は武力を用いることが難しかった」<sup>91)</sup>という。かくして武昌攻防戦の幕は切って落とされたのである。

### 3. 武昌攻防戦の推移と太平軍、清軍

#### (a) 武昌省城の攻防と向榮の洪山陣地攻略

12月27日から始まった武昌の攻防戦について、檔案史料に残された記載は多くない。その理由は常大淳らの上奏が12月22日を最後に途絶え、城外の白木嶺に陣をしいた向榮や岳州にいた徐広縉の報告からは城内の戦況を窺うことが出来ないためである。だが筆者が国立故宮博物院および National Archives で発見した稟（報告）は、武昌陥落の経緯について比較的詳しく語っている。そこで本節ではこれらの新史料と同時代人の筆記をもとに、この戦いの実態について検討することにした。

まず廖慶謀らの会稟によれば、12月28日に常大淳は小東門に登り、紫金山にある太平軍陣地の守りが疎かであると見て取った。そこで廖慶謀に命じて兵勇400名を率い、城壁を降りて紫金山を攻撃させた。廖慶謀らが太平軍の守備兵100名ほどを撃退して陣地を破壊すると、翌29日に太平軍は小亀山の陣地が同様の攻撃を受けないように、ふもとの鮎魚隄を

破壊して新たに砲台を築いた。この日長虹橋でも向榮の部隊が太平軍と交戦したが、「水を隔てて銃砲を放ったため、官兵はいまだ得手できなかった」<sup>92)</sup>とあるように、太平軍陣地に接近出来なかったために戦果はあがらなかった。

この戦いについては『武昌紀事』にも記載があり、四川勇が城壁を下りて紫金山の「屯賊」を襲い、大砲を破壊したとある。この時常大淳らは「勇気をふるって城を出て、賊を殺した者には、功績の大小を見て褒美を与える」とあるように、城外への出撃を奨励していた。とくに目標とされたのは武昌と漢陽を結ぶ浮き橋で、一つを破壊したら5,000両、二つとも壊せば1万両を出すと約束していた。だが清軍将兵は浮橋に接近できず、常禄が城内の黄鵠山に設置した大砲も太平軍の軍船を破壊出来なかったという<sup>93)</sup>。

最初の攻撃に失敗した太平軍は、城西南の文昌門、城北の観漢樓一帯でトンネルを掘り始めた。城内の清軍も「地洞を掘る音」に気づき、候補道林恩熙が巡勇数十名に城壁を下りて様子を窺わせたところ、太平軍兵士と遭遇して戦闘になった。この時双方の損害は軽微であったが、以後雙福は「兵勇が負傷するのを恐れて、兵勇が城を下りることを許さなかった」とあるように兵士が城壁の外へ出ることを禁止し、出撃を志願する者がいても認めなかった。その結果「ついに城外では濠や溝を掘ることができず、禍の根本は実にここに始まった。人々は互いに様子を眺めていたが、トンネルを破る方法はなく、ただ城内で濠溝を掘るか、月城を築くだけだった」<sup>94)</sup>と廖慶謀は述べている。

太平軍によるトンネル工事が地雷攻撃の準備であったことは、長沙攻防戦の経験からも明らかであった。通説では常大淳が太平軍の地雷攻撃を恐れ、九つの門の近くで深い穴を掘っては盲目の者に坑道を探させたと言われている<sup>95)</sup>。しかし実際のところ彼は「この城は漢代に造られたもので、下には密椿があるから断じて入ることは出来ない」と述べ、長沙に倣って城外に溝を掘り、トンネルを破壊する戦法に同意しなかった<sup>96)</sup>。また常大淳はトンネル内に水を流し込む作戦にも賛成しなかったといい<sup>97)</sup>、彼が地雷攻撃への対処法を十分に認識していなかったことが窺われる。

ところで雙福が城外への出撃を一転して禁じたことは、同治『江夏県志』が「兵士たちは勇気をふるって賊を殺したいと志願したが、褒美を惜しんでこれを行わず、人心はバラバラとなった」<sup>98)</sup>と述べたように、人々に出費を惜しんでいると受けとめられた。もともと布政使梁星源は太平軍の接近に備え、12月14日に銀2万両以上を支出して米や油、塩を備蓄し、城内の貢院に糧台を設立した。だが1853年1月3日には早くも油、塩が不足し始め、6日には「百物が昂貴」した。これに対して武昌府知府明善と軍需総局は家ごとの購入額を制限し、商人に「公平な交易」を呼びかけて事態の沈静化を図った<sup>99)</sup>。しかし桂林や長沙と異なって外からの補給路が断たれていた武昌の場合、籠城に伴う人々の苦痛は大きかった。National Archivesに残された報告も「梁方伯（星源）は城を守る兵勇に篤い褒美を与えることを敢えてしなかった。城は大きく兵は少なく、城壁一段ごとにただ兵と壮勇が一人ずつ置かれたが、毎夜ロウソクが三本支給されただけで、雨風をしのぐ小屋も作られなかった。こ

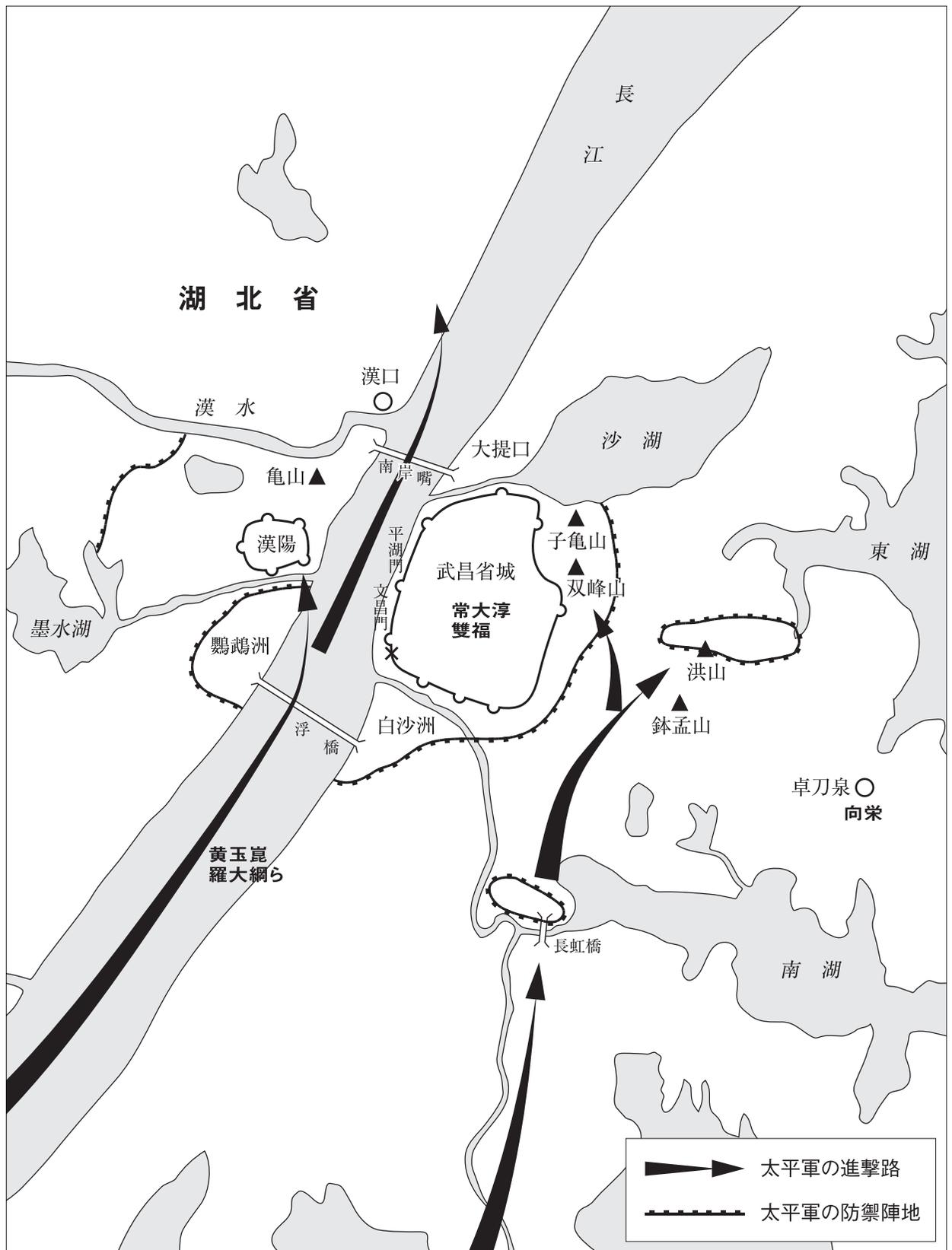


図2 太平軍武昌攻撃図

のため人心は渙散となった」<sup>100)</sup>とあるように、兵士たちの待遇が悪かったために士気が上がらなかったと伝えている。

さて12月31日から常大淳らは連日使者を派遣し、長虹橋の向榮と連絡をつけようと試みたが成功しなかった。1月4日に常禄がいま一度部下を派遣すると、はたしてこの日洪山の太平軍陣地で砲声が盛んと響いた。翌5日には使者が向榮からの手紙を持ち帰り、援軍が城東の魯家巷から卓刀泉へ陣地を移したことを知らされた<sup>101)</sup>。

この向榮の陣地移動は徐広縉の上奏にも言及されており、戦線へ到着した蘇布通阿の四川兵、福興の広東兵と共に1月2日に卓刀泉から洪山へ進攻したとある。この時太平軍は陣地に立てこもって応戦せず、清軍も「勇敢な者と怯えた者が混じっていた」<sup>102)</sup>ために足並みが揃わなかった。だが常大淳が「賊と転戦して連戦連勝」と記された向榮の手紙を紹介すると、守備側は元気を取り戻した。5日に太平軍は雨に乗じて夜襲をかけたが、按察使瑞元は「あまねく城上を巡」って将兵を叱咤し、攻撃を防いだという<sup>103)</sup>。

1月7日に向榮は洪山の太平軍陣地に攻勢をかけ、激戦の末にこれを占領した。この戦闘の様子を廖慶謀は次のように報じている。

二十八日（1月7日）に向提督は隊を二十に分け、洪山の賊陣地に向かって進攻した。賊の陣地十余ヶ所を続けざまに焼き、賊匪千余名を殺して、賊の馬百余頭、餉銀二鞘と器械を数え切れないほど奪った。賊匪はこのために肝をつぶし、軍興以来これほどの大勝利はいまだなかった。後に聞いたところでは、今回の勝利で賊匪は恐れること甚だしく、薙髪して逃げ出す者が数百人いたという。もし引き続いて勝利を収めれば、近いうちに成功することも難しくないように思われた<sup>104)</sup>。

また National Archives の報告も「大兵が路を分けて囲み、賊の陣地十五ヶ所を次々と破った。殺し捕らえ、焼き殺した数は二千余りにのぼり、奪った砲や武器、火薬、馬は大変多かった。まったくの大勝利だった」<sup>105)</sup>と述べている。実のところ、この日向榮は各部隊から勇敢な兵3,600名を選び、みずから檄を飛ばして彼らを先頭に全軍を突撃させた。和春と秦定三の率いる湖南、貴州兵は洪山を占領し、さらに東の城壁から500メートル余りの雙鳳山まで攻め込んだ。だが馬龍の率いる四川兵は田家園で太平軍の抵抗にぶつかり、なかなか前進できなかった。和春と秦定三が戦果をあげつつあるのを知った馬龍は「心の中で嫉妬し、ついに伝令して部隊を撤退させることを請うた」とあるように彼らの功績となることを嫌い、武昌城壁まであと一歩というところで兵を引きあげさせた<sup>106)</sup>。また一説では四川兵が太平軍の残した「財物」を略奪し始めると、湖南、貴州兵もこれに倣ったため、やむなく向榮は全軍に攻撃の中止を命じたという<sup>107)</sup>。

このように清軍は目前の勝利を手中にすることが出来なかったが、和春の幕僚だった蕭盛遠は「わが軍はすでに城下に至ったが、もし城内の官兵が両面から挟み撃ちにしていれば、

厚い包囲も立ちどころに解けたことだろう」<sup>108)</sup>とあるように、その原因の一端を城内の守備隊が呼応しなかったことに求めた。だが廖慶謀によると「援兵の勝利」を見た常大淳は、大東門と城壁の北隅から兵勇を外へ下ろして雙鳳山、長春観と小亀山を攻撃させた。もっとも雙鳳山へ向かった一隊は「如何せん賊匪は牆内に隠れ、開けた穴から銃を撃ったため、兵勇は進むことが難しかった」<sup>109)</sup>とあるように、太平軍の狙撃を受けて前進できなかった。また小亀山へ向かった一隊も鮎魚隄を越えることができず、太平軍陣地を破壊するには至らなかった。しかし守備隊の出撃については『武昌紀事』にも記載があり、常大淳が「持重」<sup>110)</sup>する余りチャンス逃したのではなかったことがわかる。

1月9日に向榮は再び各軍に命じて、洪山、東嶽廟、白魚山から沙子嶺、長春観、濂溪へ向けて攻撃をかけさせた。この戦いには都司張国樑の軍も加わったが、「勝負はまだ分けず、おのおの撤退した」とあるように決着はつかなかった。この晩城内に向榮の手紙が届き、「城内の兵力が不足であれば、今後援軍が戦闘する時に城内は必ずしも呼応しなくてよい」<sup>111)</sup>と記されていたという。

つまり元々兵力不足だった武昌の清軍が守備に専念し、目立った出撃を行わなかったのは、城外の総司令官であった向榮との合意に基づくものであった。National Archivesの報告は武昌陥落の原因について「二十一日（1月7日）の大勝利によって、城外の援軍が驕り、城内の兵は守備を怠ったためであった」<sup>112)</sup>と語っている。勝利がもたらした油断は、向榮の戦局判断にも当てはまる清軍の過失であったと言えよう。

## (b) 武昌省城の陥落と太平軍

1月12日早朝、太平軍は文昌門一帯の城壁を地雷によって爆破し、城内へ突入して武昌省城を占領した。国立故宫博物院に残された徐広縉の上奏は次のように述べている。

向榮の報告によると、わが軍は二十一日（1月7日）に匪を攻めて勝利した後、連日出撃して賊の陣地を攻め、陣地を移して城下に進駐しようとした。だが如何せん城外にはなお賊の陣地が八カ所あり、およそ城に通じる路には賊の陣地があって防禦しており、屢々攻めても前進出来なかった。大兵は現在東側にいるが、平湖、文昌各門はみな西側にあつて、長江に面しているために、わが兵は越えることが出来なかった。

初四日（1月12日）の朝は深い霧が立ちこめていたが、突然武昌城が賊の地雷によって攻め破られたとの知らせが届いた。驚いた向榮はすぐに総兵たちを従え、手分けして長春観、田家園などの賊の陣地へ向かった。力の限り槍炮を放って、一刻も早く城下へたどり着こうとしたが、逆匪は陣地を出て抵抗しようとはせず、壁の向こうから発砲するばかりだった。こうして戦っているうちに、城上の官兵が多く城壁をつたって逃げてきた。

彼らの話によると、逆匪は文昌門、平湖門一帯でトンネルを二十数カ所も掘り、明け

方に地雷を爆発させた。文昌門付近の城壁は四カ所が崩落し、逆匪は裂け目から勢いに乗って攻め入った。城上の兵は抵抗することが出来ず、みな潰え散じたとのことだった。これを知った向荣らは兵たちをせき立てて攻撃し、わが兵は幾度か賊の陣地に接近したが、逆匪の槍炮や火罐によって次々と撃退され、負傷者は多数にのぼった。やむなく軍を撤退させ、別に攻撃を計画せざるをえなかった。

ここからは太平軍の攻撃が全くの予想外であったこと、城壁が爆破されて太平軍が突入すると、清軍守備隊は抵抗出来なかったことが窺われる。この上奏を受けた咸豊帝は「焦急の至りである。いったいどうするつもりか?!」<sup>113)</sup>との殊批を記し、1月26日の上諭では「先の奏報ではなお武昌の包囲はおのずから解けると言っていたのに、数日も経たぬうちに陥落の知らせを送るとは何事だ。軍情の緩急をただ文書に頼り、夢見心地でいたのではないのか」<sup>114)</sup>とあるように徐広縉と向荣を激しく叱責した。

この日の戦いについて廖慶謀は次のように述べている。元々常大淳は12日に城の内外から攻撃することを向荣に提案していたが、朝早くに城は陥落した。後に太平軍兵士から聞いたところでは、彼らは文昌門、平湖門のトンネル内に2-3,000斤の火薬を装着し、開龍口と名づけた。12日の午前7時頃、文昌門北側で地雷が爆発し、十数メートルにわたって城壁が崩落した。太平軍はここから城内へ突入し、清軍が抵抗しようとする、再び地雷が爆発して多くの兵が傷ついた。常禄は四川勇を率いて奮戦したが、太平軍は益々多くなり、ついに抵抗出来なくなった。太平軍が城上に登って「乱殺」すると、觀漢樓でも地雷が爆発した。清軍将兵が「号衣を脱ぎ、武器を捨てて」城壁を下り、東へ向かって逃走すると、「街上の百姓」もこれに続いた。城内へ入った太平軍は「人に逢えばすぐ殺」し、とくに大小の東門では多くの者が殺された。また太平軍は東門外にあらかじめ1万人の伏兵を置いており、2-3,000名の兵勇が城壁を越えて清軍陣地へ逃げようとしたところを殺された。この日兵勇の死者は1万名余り、民間人の死者もほぼ同数だったという<sup>115)</sup>。

これに対して National Archives の報告はいささか様相が異なっている。それによれば、1月7日の勝利後、武昌一帯は雨と雪で冷え込み、積雪もあって軍事行動は制約を受けた。12日の寅刻（午前3時頃）に突然文昌門で地雷が爆発して城壁が崩落したが、この時城内へ侵入した太平軍将兵は数百人に過ぎなかった。しかし城内の清軍は「黄旗を一目見ると決して戦わず、紛々と城壁を飛び越えて逃げ」出した。続いてトンネルから数百名の太平軍兵士が姿を見せると「城内をあげて慌て乱れた」<sup>116)</sup>と述べている。

まず城内の抵抗について、『武昌紀事』『武昌兵燹紀略』は太平軍が城壁を爆破した時、守備兵の多くは寝ているか、持ち場を離れて買い物をしており、城壁が崩落すると「ちりぢりに城をつたって逃げた」<sup>117)</sup>と記している。また『粵匪紀略』によれば、この時雙福は公館にいたために指揮を執ることができず、常禄と副将の春榮は「兵を率いて巷戦」<sup>118)</sup>して戦死したものの、少なくとも組織的な抵抗は行われなかったようである。

次に城外の清軍陣地へ逃げようとした将兵や民間人が、待ち伏せしていた太平軍に虐殺され、城内へ乱入した太平軍によって無差別な殺戮が行われた点については、『武昌兵燹紀略』にも同様の記述がある。だが城内の守備兵が5,000名程度だったという前提に立てば、廖慶謀の挙げた2万人は多すぎるかも知れない。「兵勇を追殺し、街中に突撃すると、市井の婦人であれ会えば殺された。殺戮された者は八千を数えた」とあるように、1万人弱という数字が妥当なところと考えられる。なお将兵の死者は多くが河南、安徽、四川、雲南、貴州から動員された兵で、武昌出身の兵たちは「自宅の中に隠れ、賊の渠魁が入城するとみな降伏したため、死んだのはわずか十の二、三であった」<sup>119)</sup>という。

むしろ城内の死者で多かったのは、この日夜に驚きと恐怖の中で自殺した清朝官員や有力者とその家族であった。廖慶謀によれば「城中で服毒して自殺した者が少なくない。多くは家中の男女、大小が命を捨て、その数は数万人を下らない」<sup>120)</sup>とある。National Archivesのもう一つの報告も「常中丞(大淳)はその場で殺され、眷属で連れ去られた者が七、八人いたが、現在行方不明である。梁藩司(星源)および武昌、漢陽の両知府は共に殺され、その死体は長江に投げ捨てられた。瑞臬司(元)はまず家族に自盡させ、自ら幼子に手を下した後に殉死した。その他に道府以下の文武官員で殺されたのは三十余名にのぼる」<sup>121)</sup>と報告している。

さらに武昌のエリート家族でも自殺したケースは多く見られた。呉樂清(道光年間拳人)はその一例で、後に清朝官員だった息子が提出した報告によれば、「賊に従うことを敢えてせず、一家をあけて死のうとしたが、召使いたちに止められた。そこで夜中に隙に乗じて、家中がみずから首をくくって殉難した」<sup>122)</sup>という。結局太平軍が武昌を退出した後に地元の紳士が調べたところ、収容した遺体は6万5,000人にのぼった<sup>123)</sup>。それは厳しい軍規によって清軍よりも略奪や暴行が少なかった太平軍の姿とは矛盾するが、清朝官員とその支持者を「妖魔」と見なして排撃し、徹底的な殺戮を厭わなかった太平天国の宗教性もたらした一つの結末であった。

#### 4. 武昌占領後の諸政策と清朝の反応

##### (a) 武昌占領後の諸政策と都市住民

さて入城した太平軍は「官兵は留めず、百姓は傷つけるなかれ」<sup>124)</sup>という命令を出し、1月13日から家々に対する捜索を行った。廖慶謀はその様子について「賊匪は門ごとに衣物、銭米を捜索し、兵勇を採すのだと言った。もし刀や鉄砲を惜しんだり、おのれの身を守ろうとすれば、むごたらしく殺された。城内の街々は探し尽くされ……、初六日(1月14日)も引き続き家捜しが行われて、僅かな穀物や布も留めることを許さなかった」と述べている。15日には「安民の偽示」が出されて殺戮は止んだが、人々はみな食物がなく、城内には死体が山のように残された。そこで16日には家々から2名を出すように命令が下り、遺体の処理と街道の清掃を行わせたという。

1月17日に洪秀全を初めとする諸王が次々と入城し、洪秀全は巡撫衙門に、楊秀清は布政使、北王韋昌輝は按察使、翼王石達開は学政の役所にそれぞれ居を構えた。またこの日楊秀清は「城内の全ての男女は上帝を拝んで入会せよ。わずかでも違う者はこれを許さない」<sup>125)</sup>との命令を出した。そして19日には閩馬廠で上帝教の宣伝活動である「講道理」が行われた。『武昌紀事』によると、講道理に先立って高台が設けられ、紅のラシャ帽をかぶった40歳余りの男が扇を手に上座に座った。そして人々を近くへ招いて説教を始めたが、「言うところは荒唐無稽で、みな愚民を煽惑する言葉」だった。そして聴衆の中から反論する者が現れると男は怒り、この者を五馬分屍の刑にしたとある<sup>126)</sup>。

いっぽう武昌占領後の行動の中で、最も特徴的だったのは住民を男館、女館に収容して軍へ編入する社会制度であった。National Archivesに残された報告は「もし官吏や兵勇でなく、紅帽をかぶっていない者は、均しく男女を別にして二十五人を一館とし、仲間を派遣して管理させた」<sup>127)</sup>と述べている。金田団營以来の男營、女營を都市住民に敷衍したこの制度は、南京到達後に太平天国の社会制度として定着することになった。武昌の事例はその先がけと言うべきもので、1月14日に殺戮が止むと「上帝を拝め」という命令が出され、登記所が設けられて「氏名と年齢、籍貫を報告し、記録簿に書き込まれた。登録が終わると一カ所に集められ、初めは十人を一館、ついで二十五人を一館として、みな頭目に統率させた」とあるように住民の登録と組織化が始まった。また女性は別に収容が進められ、「数姓の者を一家に併せて住ませ、また二十五人を基準とした」という。

この男館、女館は太平天国のもう一つの社会制度である聖庫制と並行して実施された。占領当初の太平軍は「進貢公所」を設け、人々に金銀、銭米、ニワトリやアヒル、茶葉などの物品の献上を求めた。また「進貢をした者はおのおの本業に戻ってよい」と言ったため、人々は「上帝を拝む」ことは兵になること、「進貢する」ことは民のままでもいられることだと解釈し、兵役を忌避するために争って貢ぎ物を献げた。さらに「埋蔵した金銀が発覚したら、家中を斬首する」という命令が伝わり、怯えた人々は家中の財産を差し出して公所へ持ち込んだという。

ところが1月20日に太平軍は、進貢を行った者を含む武昌城内の全住民に貢院で点呼を受けるように命じた。翌日には人々に城外へ分駐せよとの命令が出され、漢陽に移った人間についても4-50人を一隊として組織化が図られた。さらに22日には「城外に駐屯してすでに入隊した者は、おおむね軽装となって号布とつけよ」という命令が出た。人々は前後左右中の10軍に分かれた太平軍の各部隊に振り分けられ、前に「太平某軍」、後に「聖兵」と記された布をつけるように命じられた。ここに至って人々は進貢が財産を没収するための口実であることを悟ったが、すでに後の祭りだったとある。

ここに記された太平軍の人々に対する部隊編入と財産没収の手段は巧妙であり、男女だけでなく壮年の者を「正牌」、老人や子供を「牌尾」に分け、病人や障害者を「能人館」「老疾館」に収容して治療を施すなど、振り分けの方法も系統的であった。また「僻巷の人家」に

至るまで住民を搜索し、「百姓で城中に住むことを得たのは十に二、三もいなかった」<sup>128)</sup>とあるように政策実行の度合いは徹底していた。

これが可能となったのは、何ととっても漢口に代表される商業中心地の豊かな富によって、急増した兵員を養うだけの物資を獲得できたことに求められる。また道州や郴州、岳州一帯で参加した反乱勢力の組織を解体し、その能力に応じて土営、水営を編制するなど、参加者の軍への編入について経験を積んでいたことも見逃せない。さらに注目すべきは「この時はけだし専ら城市から奪い、郷民を乱さなかった」<sup>129)</sup>とあるように、財産没収や強制的な入隊が都市住民をターゲットに進められたという点である。

別稿で検討したように、蜂起当初の太平軍は上帝会員以外の者に必ずしも参加を強要しなかった<sup>130)</sup>。この傾向は湖南進出後にも見ることが出来、だからこそ人々は「賊に恩を感じる」ようになった。ところが長沙や武昌など都市の攻略が日程に上ってから、太平軍の行動には変化が現れた。『賊情彙纂』は次のように述べている。

逆党は長沙から武漢を陥落させてから、略奪のやり方は屢々変わった。初めは専ら城市から奪い、郷民から略奪しないばかりか、進撃先で奪った衣服や品物を貧しい者に分け与え、「将来租税を三年間免除する」といったデマを流した。村人たちはこれを徳と見なし、富める者は城内が困守しているのを坐視し、一銭も援助しようとしなかった。また貧しい者は賊がやってくれば自分の利益になるから幸いだと考えた。

ここからは都市に蓄積された富を奪って農村に分配し、また農村の負担軽減を約束することで人々の支持を取り付け、都市を孤立させて攻略を容易にしようとする意図が窺われる。こうした戦略は「愚かな民はついに賊に買収され、甚だしい場合は賊に至るや争ってこれを迎え、官軍が到着するとみな店を閉めた。こうした不屈きな情形はどこでも同じだったが、とくに湖北がひどかった」<sup>131)</sup>とあるように、太平軍が湖北一帯を進撃するうえで効果を上げた。だがそれは占領された都市住民に大きな犠牲を強いるものだった。

武昌に進駐した当初、太平軍は郊外の「郷民」がニワトリや豚、魚や餅などを売りに来ると、城内の人々が城を出てこれを買うことを認めた。だがその隙に脱走する住民が次々と「盤査は厳密」となり、見つかって殺される者も出た<sup>132)</sup>。また太平軍が進貢公所を開いた当初、貢ぎ物を献げる者は殆ど現れなかった。これに怒った太平軍は「ついに戸ごとに搜括を行った」<sup>133)</sup>とあるように、強制的に財産の没収を始めた。いっぽう武昌の知識人は貧困な辺境からやって来た太平軍将兵を蔑み、とくに纏足をしていない女性兵士を「大脚に高い髻」などと悪意をこめて描写した。戦闘で民間人の犠牲が多かったこともあり、双方が異質な相手に対する不信感と敵意をつのらせた様子が窺われる。

こうした齟齬は入隊後の都市住民に対する苛酷な待遇となって現れた。「およそ賊に擄せられた者は、多くが商人や農民で、武芸に秀でておらず、鉄砲を撃たせても命中しなかつ

た」とあるように、すぐに戦力となる者は少なかった。また「賊は日夜脅されて従った人々を使役して各倉の穀米を船に積ませたが、力が弱くて耐えられない者が途中少しでも休むと、すぐに鞭打たれた。その屈辱に耐えかね、みずから水に身を投げる者もいた」と言われたように、重労働や不当な扱いに抗議して自殺する者も出た。さらに女館に収容された女性は多くが「弓足」すなわち纏足をしており、「みずから荷物を担ぎ、息子を抱き娘を連れざるを得ず、絡繹として街中を進んだ」とあるように移動には大きな苦痛が伴った。しかし女館を統率する「賊婦」は彼女たちへの苛立ちを隠さず、「服装が華美だったり、かんざしや腕輪をしていると、すぐに賊婦に奪われた」<sup>134)</sup>という。

これら都市に対する収奪を最もよく示すのは、太平天国の暦で大晦日に当たる2月2日に行われた「選妃」であった。この日洪秀全（楊秀清ともいう）は閩馬廠に集まった若い娘たちから60名を選んで後宮へ入れ、命令に従わない者は親子共に処刑すると厳命した。父母たちは娘にみすばらしい格好をさせ、選に漏れることを願ったが、準備された水で顔の汚れを落とされてしまい、逃げるが出来なかったという。また天王に貢ぎ物を献げる男性幹部に混じって、館内の美しい娘を献上する女性幹部もいた<sup>135)</sup>。

1853年2月3日に太平天国癸好三年の正月が盛大に祝われた。将校たちはそれぞれの上官に新年の挨拶を行ったが、「みな梨園の衣甲で身をつつみ、鐘や太鼓の音が鳴り響くなど、武昌城内はあたかも一大劇場と化した」とある。また爆竹の音は雷のように轟き、地上に積もった燃えかすは一寸余りにもなったという<sup>136)</sup>。汪士鐸は太平軍将兵の故郷であった広西の貧困ぶりについて「太平天国の者たちが言うには、湖南省へ入って初めてこの世に銀貨というものがあることを知ったとのこと。その貧苦は察するに余りある」<sup>137)</sup>と指摘している。それまでおよそ富とは無縁だった辺境の下層移民にとって、都市の祝祭空間こそは小天堂の到来をイメージさせるものだったと言えよう。

## (b) 清朝の対応と武昌近辺の攻防戦

さて武昌の陥落という現実を前に、清朝はどのような対応をしたのだろうか。第一報を受けた咸豊帝が徐広縉らを叱責すると、彼らの責任を追及する上奏が多く出された。そこでは徐広縉が太平軍の進撃を食い止める努力をせず、「岳州が失われたのに、なお迅速に前進して弾圧を計画せず、湘陰に駐屯して賊の回竄を防ぐと言いながら、実際には賊を避けている」<sup>138)</sup>などと、後方に留まっていることに非難が集中した。また「逆匪が流れに順って下り、武昌を窺ったのに、なお巴陵の土匪を剿辦することを名目に、兵を擁して自衛し、省会の危急を座視して救わなかった」「武昌が囲まれ、省城の兵は多くなく……、救いを待ち望む者は一日千秋の思いであったのに、該大臣は十万の衆を擁しながら、兵を駐屯させて進まなかった。省城が失われたのは、誰の罪なのか」<sup>139)</sup>とあるように、武昌陥落の原因を徐広縉の臆病と無能に帰する告発が相次いだ。そして彼の罪は賽尚阿よりも重く、咸豊帝が与えた遏必隆刀で自盡を命じるように求める意見さえあった<sup>140)</sup>。

その後出された徐広縉の供述によると、彼は太平軍を追撃するにあたって1,000名の兵を率いていたに過ぎず、晏仲武の反乱軍が「餉銀」3万両を奪うと、補給ルートを確認するまで湘陰県に留まらざるを得なかった。また1月13日に岳州に到着したところ、武昌が陥落したとの知らせが届き、「岳州の人心が惶恐しただけでなく、長沙の士民も紛々と遷徙」するなど動揺が広がったために、湖南提督鮑起豹が岳州に到着するのを2月3日まで待った。さらに向榮から砲船を送るように要請されたが、長沙では調達出来ず、岳州で新たに漁船を募っているうちに時間を浪費してしまったと述べている<sup>141)</sup>。

結局徐広縉は1月24日の上奏で「暫く岳州に留まり」「該逆の回竄を阻む」<sup>142)</sup>と報じたことが咸豊帝の怒りを招き、2月3日の上諭で「岳郡をもって藏身の固となし、重兵を擁して自衛の謀をなした」罪によって革職拏問の処分を受けた。そしていち早く武昌へかけつけた向榮を欽差大臣に任命し、「軍營の文武は全てその統制に帰する」<sup>143)</sup>ように指示した。さらに湖南巡撫張亮基を後任の湖広総督とし、急ぎ武昌へ向かうように命じた<sup>144)</sup>。

次に問題となったのは太平軍の進路であった。李秀成の供述によると、はじめ洪秀全は「中原」の地である河南に都を置こうとする考えを持っていた。だが湖南の老水夫に「河南は河が小さく食糧もなく、敵に囲まれたら救いようがない」「河南は中州の地ではあるが、堅固さという点では実のところ江南に及ばない」と説得された楊秀清は、「帝王の家」である南京をめざすことにしたという<sup>145)</sup>。

確かに清朝は琦善を欽差大臣に任命した時点で、太平軍の河南進出にそれなりの対策を立てていた。琦善には陝甘兵、西安兵3,000名を与えて河南、湖北省境へ赴かせ、直隸提督陳金綬にも兵3,000名を率いて河南の救援に向かうように命じた<sup>146)</sup>。また琦善は「驍健」で知られた吉林、黒龍江の騎兵など8,000名を新たに動員するように求め<sup>147)</sup>、陝西巡撫張祥河も兵3,800名を河南へ送った<sup>148)</sup>。むろん「風聞では琦善は保定に稽留すること累日」<sup>149)</sup>と言われたように、その行動は必ずしも迅速とは言えなかったが、2月1日に琦善は河南の信陽州に到着して兵力を展開させ始めた<sup>150)</sup>。ここから見る限り、清朝は首都北京にとって脅威となる北進への備えについては真剣に取り組んだと言えよう。

いっぽう東進についてはどうであろうか？清朝が太平軍に揚子江下流へ向かう意図があるとの情報を掴んだのは比較的早く、常大淳は12月24日の上奏で「該逆は早くから南京へ直竄するとの説がある」<sup>151)</sup>と報じている。また章京の林映棠は「該逆の偽示には早くから金陵に定都するとの語があり、近日の軍報にもこの説がある。現在武昌下游における沿岸の防備は最も緊要である」<sup>152)</sup>と述べており、太平天国が出した告示にも南京に都を置くことを宣言した内容があったことが窺われる。

だが清朝官員の中で太平軍が東進する危険性を最も明確に指摘したのは、後に北伐軍と対決することになる候補四品京堂の勝保であった。彼は次のように述べている

逆賊は楚北をさかんと乱し、毒焰は日に盛んとなっている……。漢陽、武昌一帯は四

面に敵を受けているが、長江に囲まれているため防禦は難しく、賊はきっとここを守ろうとはしないだろう。わたくしが賊の向かうところを挙げるとすれば、第一に金陵であり、次が荊州と四川である。荊州、四川がやられてもそれほどの被害は出ないが、金陵がねらわれれば災いは速やかで大きくなる。

現在陸建瀛は命令を受けて九江へ向かっており、金陵の守備はさらに手薄である。駐防の將軍たちが防禦に努めているが、恐らくは湖南、湖北の時と情況はさして変わらない。もしあらかじめ計画を立てておかなければ、万一逆賊が流れに順って東へ向かい、真っ直ぐに金陵を犯した時に、人心は動揺するだろう。戦うことも、守ることも出来ず、必ずや敵の勢いにおじけて戦わずして潰滅するに違いない。

金陵に危急があれば、江蘇、浙江の数千里がみな震動する。また糧食の運送が滞れば、京師は坐困することになり、関係するところは少なくない。いわんや淮河、滁州などには飢民が数十万人おり、不逞の輩が多くいて、もし密かに結んで内外で互いに応じれば、蔓延の勢いとなって江淮の災いがすぐにも生まれるのである<sup>153)</sup>。

ここで勝保は太平軍の南京進出を予想し、防備が手薄な現状では守りきれないであろうこと、彼らが南京を占領すれば江蘇、浙江に大きな影響を与えるばかりか、淮河流域も混乱に陥るだろうと指摘した。はたして事態は捻軍の蜂起を含めて勝保の予想通りに展開し、彼の炯眼ぶりが窺われる。この上奏を受けた清朝は陸建瀛と署江西巡撫張芾に九江の、安徽巡撫蔣文慶に安慶および省境地帯の防衛をそれぞれ命じた<sup>154)</sup>。また2月初めには琦善と向榮に「精兵を選んで九江および安徽一帯に赴かせ、陸建瀛と会合して堵截せよ」<sup>155)</sup>と命じたが、勝保が南京の文武官員では力不足として求めた「大員」の派遣は実現しなかった<sup>156)</sup>。清朝は徐広縉解任の前日にも太平軍が「東竄を意図」していると明言し、「東路の陸建瀛らは兵力が甚だ少ない」<sup>157)</sup>こともよく認識していたが、その主たる関心はあくまで北進の阻止にあったことを物語る事実と言えよう。

最後に武昌占領後の両軍の動きについて見ておきたい。1月19日に太平軍は揚子江下流の黃州府城と武昌県へ兵を送り、これらの地を占領した。その目的は軍事物資の獲得にあり、「該逆が至ると、百姓は紛々と迎え入れ、銀錢や什物、穀米を奪った。そして船百余隻を用いて十三日（1月21日）、十四日（1月22日）に省城へ運び戻った」とあるように獲得した物資を武昌へ運ぶと共に、黃州に2,000名、武昌県に1,000名の兵を置いて新たな進撃の足がかりをつかんだ。

いっぽう解任された徐広縉に代わって軍の統率を任された向榮は、1月26日から1万6,000名の兵力で城外の太平軍陣地に攻撃をかけた。この日和春の軍が放った火箭がたまたま「賊営内の火薬」に引火すると、清軍はチャンスと見て出撃したが、新南門まで進んだところで太平軍の抵抗を受けて撤退した<sup>158)</sup>。1月29日に清軍は二手に分かれ、一隊は四川提督蘇布通阿の統率のもと長春観、小亀山へ、もう一隊は和春に率いられて新南門を攻めた。

だが「長春観の外側には長牆と深濠が築かれ、中には賊営が五、六座ある。新南門外にも城壁に沿って土城が築かれており、賊営が四座あって、均しく城上の賊と互いに呼応している。大砲も極めて多く、防備は甚だ固い」<sup>159)</sup>とあるように、太平軍が強固な陣地を構築したために清軍の攻撃は成功しなかった。

とくに水軍を欠いていたことは清軍の最大の弱点であり、向荣は「該匪は船隻が極めて多く、往来は思うがままである。大營の兵勇は長江や湖によって阻まれ、渡ることが出来る船もないので深く焦っている。わたくしは再三にわたり考えてみたが、今のところ彼らを殲滅するには先ず賊船を焼き、賊橋を壊して、彼らに互いに助け合えないようにしたうえで、手段を講じて〔武昌を〕奪回するのが最も容易であろうと思われる」<sup>160)</sup>とあるように、地上軍だけでは武昌の奪回もおぼつかないことを告白せざるを得なかった。

ちなみに向荣も上奏の中で、太平軍が「城内の百姓を二十五人ずつ一つの館に編じ、一人ずつ紅または黄布の腰牌を与えて、一人の賊が管理している。婦女も二十五人ずつ、賊女一人が管理している。城内の百姓は食糧が不足し、逃れ出る者もまた少なくない」<sup>161)</sup>とあるように、男館、女館制度を実施したことを伝えている。また興味深いのは王茂蔭の上奏で、占領後の漢口について次のように述べている。

賊は至るところ、専らいつわりの仁義を示している。彼らが漢口につくと、まず人々を安撫させ、市場も従来通り売買させて、店を閉めることを許さなかった。その取引も普段の値段通り、少しも不払いはなかったため、市場の者たちは安心した。ところが官兵が至るや、かえって酷い殺害が多かった。近くは直隸や山東でも官兵の騷擾事件が起きている。

およそ民は国のもといである。賊が略奪しないことでわが民を誘い、兵が騷擾をもってわが民に迫っているのは、民心を駆り立てて賊へ向かわせているようなものだ。民心が去ってしまったら、天下はまさに誰が共に守るといえるのか<sup>162)</sup>。

ここでは漢口に進駐した太平軍が「いつわりの仁義」によって安撫政策を取り、商人たちに従来通りの営業を行わせたことと指摘している。これは武昌で行われた都市住民に対する厳しい統制や収奪とは矛盾するが、太平軍の武昌退出後に出された報告も「漢口の居民で逃げた者は少なく、決して害を受けなかった。あらゆる尋常の店舗は、すでに十分の三、四まで回復した。ただ綢緞などの店ははまだ開かず、富戸や富商は早くから逃げ出したが、開泰薬行はつつがなかった。わずかに同知衙門およびその付近の民家が数十家焼かれたが、その他は決して蹂躪を受けなかった」<sup>163)</sup>と述べている。太平軍が進撃先できちんと代価を払い、商人が店を閉めなかったという記録は他にも多く残されており、その実どちらも事実であったと思われる。

また王茂蔭の上奏で槍玉に挙げられた清軍の略奪行為は、武昌一帯においても健在であっ

た。とくに深刻だったのは命令に従わないために長沙で解散させられた潮州勇 1,000 名で、故郷へ戻らずに「郷へ入って食を奪い、ほしいままに略奪」を行った。向荣は 60 名余りを捕らえて処罰したが効き目がなく、やむなく「これまで通り招募」<sup>164)</sup>することを要請したという。また敗残兵の収容や兵糧の不足も頭の痛い問題であった。徐広縉は「大営にはなお数万の兵がいるのに、糧台にはすでに一月分の食糧もない。もし食い違いがあれば兵が潰散してしまう恐れがある」<sup>165)</sup>と指摘している。

## 小 結

本稿は太平軍の武昌占領とその後の政策、清朝側の反応について検討した。通説では武昌の清軍守備隊は太平軍の地雷攻撃に怯え、常大淳の咨齋ゆえに士気が上がらなかったと言われるが、むしろ敗因は太平軍のトンネル工事を防ぐ方法についての認識不足にあった。また雙福が兵の損失を惜しんだのは事実だが、城外の清軍と呼応しなかった訳ではなく、むしろ無理な出撃を諫めたのは向荣の方であったことも確認された。そして 12 月 11 日の地雷攻撃は清軍の隙を完全につくものであり、守備隊は殆ど組織的な抵抗が出来ず、民間人を含めて多くの犠牲者を出したことが明らかになった。

武昌へ入城した太平軍は敗残兵の掃蕩と清朝官員の殺害を行った後、安撫政策を行って初めての都市支配に取り組んだ。その中心的な政策は男館、女館の設立と聖庫制度であり、人々は巧妙な手段で財産を没収され、25 人を単位とする太平天国の軍事組織の中に組み込まれた。その手法は農作業に不慣れな住民たちに重労働を課したり、纏足した女性に移動を強要するなど甚だ強圧的であった。また武昌の人々も貧しい辺境からやって来た太平軍将兵に対する嫌悪感を隠さなかった。

都市と農村の格差あるいは富を独占した都市住民に対する農民の反感は、現代の中国社会においても深刻な問題であるが、その根の深さを改めて実感させられる。漢口では略奪を行わず、普段通りの商業活動を行わせた太平軍であった——その点では略奪のやまなかった清軍よりはるかにましであった——が、彼らが戦闘上の必要から武昌の人々を厳しい統制下に置き、収奪したのも事実であった。毛沢東の中国革命にも当てはまることだが、太平天国の都市政策が虐げられた農村の都市に対する報復という側面を帯びていたことは否定できないと思われる。

揚子江流域に進出した太平天国が、「帝王の都」である下流の南京に向かってどのような行動を起こすのについては、別の機会に詳述することにした。

## 註

- 1) 菊池秀明『広西移民社会と太平天国』【本文編】【史料編】風響社、1998 年。
- 2) 菊池秀明『清代中国南部の社会変容と太平天国』汲古書院、2008 年。
- 3) 菊池秀明「広西における上帝会の発展と金田団營」（国際基督教大学アジア文化研究所編『アジア

- ア文化研究』35号、2009年)。同「金田団管後期の太平天国をめぐる諸問題」(高知海南史学会編『海南史学』47号、2009年)。
- 4) 菊池秀明「永安州時代の太平天国をめぐる一考察」(国際基督教大学アジア文化研究所編『アジア文化研究』36号、2010年)。同「広東凌十八蜂起とその影響について」吉尾寛編『新しい中国史像の構築に向けて——民衆反乱と中華世界』汲古書院、2012年。
  - 5) 菊池秀明「太平天国の広西北部、湖南南部における活動について」、同「太平天国の湖南進撃と地域社会」(共に国際基督教大学アジア文化研究所編『アジア文化研究』37号、2011年)。
  - 6) 菊池秀明「太平天国の長沙攻撃をめぐる考察」慶応義塾大学・三田史学会編『史学』第81巻1・2号、2012年。
  - 7) 簡又文『太平天国全史』上冊、香港猛進書屋、1962年。
  - 8) 鍾文典『太平天国開国史』広西人民出版社、1992年。
  - 9) 崔之清主編『太平天国戦争全史』1、太平軍興、南京大学出版社、2002年。
  - 10) 菊池秀明「イギリス国立公文書館所蔵の太平天国史料について」東北大学中国文史哲研究会編『集刊東洋学』102号、2009年。
  - 11) 中国第一歴史檔案館編『清政府鎮圧太平天国檔案史料』1-26、光明日報出版社および中国社会科学文献出版社、1990-2001年(以下『鎮圧』と略記)。
  - 12) 同治『寧郷県志』巻23、職官五、兵防附団練。なお太平軍は「越宿走益陽」とあるように一泊しただけで益陽県へ向かった。また太平軍は「無焚殺之事」すなわち略奪を行わなかったが、二日後に到着した潮州勇は「奸淫擄掠、民団切齒、格殺其尤、逐出境、居民始復業」とあるように略奪が激しく、怒った団練に追い出されたという(同書巻23および民国『寧郷県志』故事編第六、兵備録上)。
  - 13) 徐広縉等奏、咸豊二年十一月初七日『鎮圧』4、81頁。なお同治『益陽県志』巻11、武備によると、初め向荣軍は優勢であったが、太平軍が陸賈山に近い棉花崙を奪って砲撃を加えると「官兵不能支、遂潰」という。また太平軍は敗走する清軍を追撃し、「約斃官兵七、八百名」とある。
  - 14) 常大淳等奏、咸豊二年十一月初五日『鎮圧』4、76頁。徐広縉等奏、咸豊二年十一月初七日、同書81頁。それによると「賊匪於二十六日(12月7日)屯住林子口」とあり、先遣隊をさすと思われる。また同じく7日に郭仁布は蘭溪市で「四五千人」の太平軍と交戦しており、これが本隊と考えられる。なお8日に向荣は蘭溪市を攻めたが、「賊匪已於初更時全股逃竄……、向西林港前竄」という。
  - 15) 同治『益陽県志』巻11、武備。なお同書には「岳州之土星港」とあるが、土星港は湘潭県の北30キロにあった(光緒『湘陰県図志』巻28、兵事志)。
  - 16) 常大淳等奏、咸豊二年十一月初五日『鎮圧』4、76頁。
  - 17) 徐広縉等奏、咸豊二年十一月初七日『鎮圧』4、81頁。
  - 18) 羅爾綱『李秀成自述原稿注』増補版、中国社会科学出版社、1995年、131頁。
  - 19) 徐広縉等奏、咸豊二年十月二十六日『鎮圧』4、54頁。
  - 20) 李濱『中興別記』巻4、太平天国歴史博物館編『太平天国資料匯編』第2冊上、中華書局、1979年、62頁。
  - 21) 『天条道理書』(中国近代史資料叢刊『太平天国』1、神州国光社、1952年、368頁)。
  - 22) 常大淳奏、咸豊二年七月二十日『鎮圧』3、465頁。また張銘謙奏、咸豊二年八月初五日、同書503頁も漁船、水勇を召募するように訴えた。
  - 23) 常大淳等奏、咸豊二年十一月初五日『鎮圧』4、76頁。張曜孫『楚寇紀略』(太平天国歴史博物館

- 館編『太平天国史料叢編簡輯』1、中華書局、1961年、72頁）。
- 24) 龔裕奏、咸豐二年六月十八日『鎮庄』3、401頁。なお陳徽言『武昌紀事』によると、王東槐が岳州へ向かったのは9月のことだった（『太平天国』4、583頁）。
  - 25) 常大淳奏、咸豐二年七月二十日『鎮庄』3、467頁。また台湧奏、咸豐二年五月十三日、軍機処檔084691号。同奏、咸豐二年八月二十八日『宮中檔咸豐朝奏摺』6、641頁。共に国立故宫博物院蔵。
  - 26) 周有璽奏、咸豐二年四月十九日、軍機処檔084136-1号。
  - 27) 駱秉章奏、咸豐二年五月十六日、軍機処檔084928号。同奏、咸豐二年七月二十一日『宮中檔咸豐朝奏摺』6、314頁。
  - 28) 同治『寧鄉県志』巻23、職官五、兵防附団練。
  - 29) 同治『益陽県志』巻11、武備。
  - 30) 常大淳等奏、咸豐二年十一月初五日『鎮庄』4、76頁。
  - 31) 光緒『巴陵県志』巻35、人物志八、呉士邁。
  - 32) 徐広縉等奏、咸豐二年十一月初七日『鎮庄』4、81頁。また光緒『湘陰県図志』巻28、兵事志。
  - 33) 常大淳等奏、咸豐二年十一月初六日『鎮庄』4、79頁。
  - 34) 徐広縉等奏、咸豐二年十一月初九日『鎮庄』4、85頁。
  - 35) 軍機大臣、咸豐二年十一月十一日『鎮庄』4、86頁。
  - 36) 諭内閣、咸豐二年十一月十七日『鎮庄』4、108頁。
  - 37) 徐広縉等奏、咸豐二年十一月十九日『鎮庄』4、128頁。
  - 38) 阿霊阿等奏、咸豐二年十二月初三日『鎮庄』4、184頁および諭内閣、同日『鎮庄』4、185頁。
  - 39) 楊以増奏、咸豐三年五月十八日『鎮庄』7、230頁および阿克東阿供（同書231頁）。
  - 40) 軍機大臣、咸豐二年十一月十一日『鎮庄』4、86頁。
  - 41) 徐広縉等奏、咸豐二年十一月十九日『鎮庄』4、128頁。なお阿克東阿は「博提督又將紮岳州迤南扼要処所之兵、一併撤回東門迤北駐紮、東阿武弁言輕不能阻止」「賊匪於十一月初三日由南而至……、不意博提督不与賊戰、將兵折回湖北」とあるように、博勒恭武が兵を府城の東北に移動させるなど岳州を死守する意志がなく、太平軍が進攻すると戦わずに撤退したと証言している（阿克東阿供、咸豐三年五月十八日『鎮庄』7、231頁）。また光緒『巴陵県志』巻21、政典九、武備下、兵事下も彼が戦わずに逃げたと述べている。
  - 42) 阿霊阿等奏、咸豐三年四月十五日『鎮庄』6、410頁および博勒恭武供（同書412頁）。結局博勒恭武が戦わずに逃亡したかは不明であるが、張曜孫『楚寇紀略』は「博提督輕佻不諳軍務、標兵又孱弱、不可令居要地、請易他兵」とあるように、彼の部隊が元々戦力にならなかったことを示唆している（『太平天国史料叢編簡輯』1、72頁）。また陳徽言『武昌紀事』は博勒恭武が「賊至望風先潰」であったと述べたうえで、彼が武昌に戻ると怒った常大淳は入城を許さなかったとしている（『太平天国』4、585頁）。
  - 43) 王茂蔭奏、咸豐二年十一月十二日、軍機処檔087446号（王茂蔭撰、張新旭等点校『王侍郎奏議』黄山書社、1991年、28頁）。
  - 44) 王柏心『百柱堂全集』巻16、与夏宗山中書書。また同書巻首の国史本伝によれば、彼は道光年間進士で、1852年に団練の結成に取り組んで翌年張亮基の幕友になり、曾国藩や胡林翼に献策を行った。また左宗棠とも多くの書簡を交わすなど交流が深かった。
  - 45) 諭内閣、咸豐二年十一月十五日『鎮庄』4、99頁。なお軍機大臣、咸豐二年九月初六日には「如長沙賊匪被我兵攻剿、意図北竄、務須先期探明、密派將弁帶兵繞出賊前、迎頭截擊」とある（『鎮

- 庄』3、596頁)。
- 46) 諭内閣、咸豊二年十一月十七日『鎮庄』4、108頁。
  - 47) 徐広縉奏、咸豊二年十一月二十四日『鎮庄』4、143頁。
  - 48) 軍機大臣、咸豊二年八月十一日『鎮庄』3、522頁。
  - 49) 博勒恭武奏、咸豊二年八月十九日『宮中檔咸豊朝奏摺』5、549頁・550頁。
  - 50) 軍機大臣、咸豊二年八月初十日『鎮庄』3、519頁。
  - 51) 常大淳奏、咸豊二年九月初六日『鎮庄』3、598頁。
  - 52) 諭内閣、咸豊二年十二月初四日『鎮庄』4、189頁。
  - 53) 諭内閣、咸豊二年十二月初四日『鎮庄』4、190頁。
  - 54) 諭内閣、咸豊二年十一月二十五日『鎮庄』4、149頁。
  - 55) 光緒『巴陵県志』巻21、政典九、武備下、兵事下に「初六日(12月16日)賊至城陵磯、復奪民舟五千余、東下」とある。また蕭盛遠『粵匪紀略』賊陷岳州直撲鄂城には「初六日賊由岳州水陸並下、郡城已空」とある(『太平天国史料叢編簡輯』1、28頁)。
  - 56) 常大淳等奏、咸豊二年十一月十二日『鎮庄』4、92頁。
  - 57) 徐広縉奏、咸豊二年十一月十九日『鎮庄』4、128頁。光緒『咸寧県志』巻6、雜記、兵防記。なお蒲圻県知県周祥和らは兵400名を率いて交戦したが戦死した(同治『蒲圻県志』巻3、祥異)。
  - 58) 常大淳等奏、咸豊二年十一月十二日『鎮庄』4、92頁。この時期の太平軍の総数については、常大淳等奏、咸豊二年十一月十二日、軍機処檔087560号も「匪衆数万、此時官兵尚止五千有余、断難制敵。惟望徐広縉大兵速来、以救危急」とあるだけで、具体的な数字は挙げていない。張徳堅『賊情彙纂』巻11、賊数、新賊は「西竄寧益一带、未幾東出湘岳、復得前数、盡擄商民船隻近十五万人矣」と述べているが、これは長沙到達時の兵力を10万人とする前提で書かれており、鵜呑みには出来ない。むしろ長沙攻撃時の人数まで回復したというニュアンスにこそ注目すべきかも知れない。さらに佚名『武昌兵燹紀略』は「初賊入武昌、粵東西匪二万余、湖広匪四万余、粵西女賊万余」(『太平天国』4、572頁)と述べており、この方が実数に近いと思われる。なお崔之清氏は佚名『粵匪犯湖南紀略』の「及至長沙而上、四府土匪附洪者数万」(『太平天国史料叢編簡輯』1、66頁)という記載をもとに、5万人前後であろうと推測している(崔之清主編『太平天国戦争全史』1、太平軍興、589頁)。
  - 59) 徐広縉奏、咸豊二年十一月十九日『鎮庄』4、128頁。
  - 60) 蕭盛遠『粵匪紀略』賊陷岳州直撲鄂城(『太平天国史料叢編簡輯』1、28頁)。
  - 61) 徐広縉奏、咸豊二年十一月十九日『鎮庄』4、128頁。
  - 62) 徐広縉奏、咸豊二年十一月二十八日『鎮庄』4、166頁。また光緒『巴陵県志』巻21、政典九、武備下、兵事下には「道光二十八年(1848)有粵人杜姓、某姓三人者馱路硃砂橋買地作屋、云将往来過宿地、邑人驅之不果。有晏仲武者族大而人頑、与之通、從至広西授(受の誤り)其教、郷人多知之。及賊至長沙、或以变常事告知胡方毅、不問。而晏仲武走長沙請賊速下。[晏]仲武旋聚衆劫餉於路、戕運官解役徒衆皆盡」とある。ここで1848年に晏仲武が接触したのが上帝会であったのか、青蓮教などの他組織であったかは明確ではなく、筆者は後者の可能性が高いと考える。ただし1852年の長沙攻撃にあたり、太平軍の方から動員工作があったのは確実で、晏仲武が「偽提督之職」を受けたのもこの時であろうと考えられる。
  - 63) 程喬采奏、咸豊二年四月三十日『鎮庄』3、598頁。龔裕奏、咸豊二年六月十八日、同書598頁。
  - 64) 佚名『武昌兵燹紀略』(『太平天国』4、567頁)。なお同書はこの時に雙福が「湖南多險、且阻洞庭、粵匪不下長沙、能飛渡焉」と語ったため、常大淳は油断して防備の強化を怠ったと述べてい

る。張曜孫『楚寇紀略』も張曜孫が岳州と湖口の防備を強化するように求めたところ、常大淳はこれ聞き入れなかったとしている（『太平天国史料叢編簡輯』1、72頁）。武昌失陥の原因を常大淳と雙福の無能と臆病さに求める議論は多いが、少なくとも守備隊の兵力不足は清朝の防衛計画の下手際によるものであり、彼ら個人にその責めを負わせることは出来ないだろう。

- 65) 常大淳等奏、咸豊二年十一月十二日『鎮圧』4、92頁。また同奏、咸豊二年十一月初六日、同書79頁は「現在省城内外存兵止及二千、陝甘官兵僅到四百余名、其余二千数百名尚未據報入境、情形甚爲緊急」と述べている。なおこの時陝西から派遣された援軍の総兵力は3,000名で、12月初旬までに数回に分かれて湖北省内へ入った（舒興阿奏、咸豊二年九月二十四日、軍機処檔086824号および張祥阿奏、咸豊二年十一月初六日、同087553号）。
- 66) 李濱『中興別記』巻4（『太平天国資料匯編』第2冊上、64頁）。
- 67) 佚名『武昌兵燹紀略』（『太平天国』4、568頁）。
- 68) 陳徽言『武昌紀事』咸豊七年五月吳嘉賓序（『太平天国』4、580頁）。
- 69) 簡又文『太平天国全史』上冊、441頁。
- 70) 崔之清主編『太平天国戦争全史』1、太平軍興、600頁。
- 71) 廖慶謀等会稟、咸豊二年十二月二十日、軍機処檔088385号。この稟は同日に出された河南巡撫陸应穀の上奏（『鎮圧』4、249頁）の附件で、署孝感県知県李殿華と連名で提出された。
- 72) 徐広縉奏、咸豊二年十一月二十四日『鎮圧』4、143頁。
- 73) 廖慶謀等会稟、咸豊二年十二月二十日、軍機処檔088385号。
- 74) 佚名『武昌兵燹紀略』（『太平天国』4、568頁）。
- 75) 陳徽言『武昌紀事』（『太平天国』4、585頁）。
- 76) 張曜孫『楚寇紀略』（『太平天国史料叢編簡輯』1、72頁）。
- 77) 陳徽言『武昌紀事』（『太平天国』4、586頁）。
- 78) 廖慶謀等会稟、咸豊二年十二月二十日、軍機処檔088385号。また漢陽を攻撃した太平軍指揮官については郭廷以『太平天国史事日誌』商務印書館、1946年（上海書店再版、1986年、上冊）198頁。張德堅『賊情彙纂』巻2、劇賊姓名下、黃玉崑（『太平天国』3、51頁）。
- 79) 民国『夏口県志』巻8、兵事志、歴代兵事。佚名『武昌兵燹紀略』（『太平天国』4、568頁）。
- 80) 廖慶謀等会稟、咸豊二年十二月二十日、軍機処檔088385号。
- 81) 常大淳奏、咸豊二年十一月十四日『鎮圧』4、95頁。
- 82) 羅爾綱『李秀成自述原稿注』増補版、131頁。
- 83) 李汝昭『鏡山野史』（『太平天国』3、5頁）。
- 84) 張德堅『賊情彙纂』巻5、偽軍制下、水営（『太平天国』3、141頁）。また同書巻2、劇賊姓名下、唐正財によると、彼は木客と米商人を兼ね、1852年夏に下流へ「貿易」に出かけたが、岳州で太平軍に捕らえられた。楊秀清が「好言」をもって彼を典水匠に封じると「甘心従賊」となり、武昌、漢陽間の浮橋作りで活躍したという（『太平天国』3、69頁）。
- 85) 雷以誠奏、咸豊二年十一月二十九日、軍機処檔087822号。
- 86) 光緒『咸寧県志』巻6、雜記、兵防紀。
- 87) 汪堃『盾鼻隨聞録』巻2、楚寇紀略（『太平天国』4、365頁）。
- 88) 同治『巴陵県志』巻10、武備下、兵事。
- 89) 王之斌奏、咸豊二年十一月十九日、軍機処檔087578号。ちなみに王之斌は太平軍の「声東撃西之計」が成功するのは、略奪が抑制されているために被害の報告が届かない結果であり、岳州が陥落したのはその証拠だと述べている。また清軍将兵のアヘン吸引について指摘し、彼らを帰郷

させて少人数による強力な部隊へ再編しない限り勝利はおぼつかないと述べている。

- 90) A Letter by the French Lazarist Missionary Dr. L. G. Delaplace, *Annals of the Propagation of the Faith*, vol. 14 (1853), pp. 215–218 (Prescott Clarke and J. S. Gregory, *Western Reports on the Taiping*, Honolulu: The University Press of Hawai'i, 1992, p. 24).
- 91) 廖慶謀等会稟、咸豊二年十二月二十日、軍機処檔 088385 号。なお太平軍の武昌攻撃が始まった期日は史料によって異なり、『武昌紀事』は 25 日夜、『武昌兵燹紀略』は 26 日とする。ここでは廖慶謀等会稟の期日に従う。また雙福は全軍を城内に撤退させるに当たり、「所設砲台、營壘均不拆毀」であったため、太平軍に利用されたという（『太平天国史料叢編簡輯』1、72 頁）。
- 92) 廖慶謀等会稟、咸豊二年十二月二十日、軍機処檔 088385 号。
- 93) 陳徽言『武昌紀事』（『太平天国』4、589 頁）。
- 94) 廖慶謀等会稟、咸豊二年十二月二十日、軍機処檔 088385 号。
- 95) 陳徽言『武昌紀事』（『太平天国』4、587 頁）。
- 96) 稟報武昌失陷詳細情形、咸豊二年十二月、F.O. 931 1386、National Archives 蔵。
- 97) 民国『湖北通志』卷 71、武備志九、兵事五、粵匪。
- 98) 同治『江夏県志』卷 5、兵備志、兵事紀略。
- 99) 陳徽言『武昌紀事』（『太平天国』4、589 頁）。
- 100) 稟報武昌失陷詳細情形、咸豊二年十二月、F.O. 931 1386。
- 101) 廖慶謀等会稟、咸豊二年十二月二十日、軍機処檔 088385 号。
- 102) 徐広縉奏、咸豊二年十二月初五日『鎮圧』4、196 頁。
- 103) 陳徽言『武昌紀事』（『太平天国』4、589 頁）。
- 104) 廖慶謀等会稟、咸豊二年十二月二十日、軍機処檔 088385 号。
- 105) 稟報武昌失陷詳細情形、咸豊二年十二月、F.O. 931 1386。
- 106) 蕭盛遠『粵匪紀略』賊陷岳州直撲鄂城（『太平天国史料叢編簡輯』1、29 頁）。
- 107) 佚名『武昌兵燹紀略』（『太平天国』4、570 頁）。
- 108) 蕭盛遠『粵匪紀略』賊陷岳州直撲鄂城（『太平天国史料叢編簡輯』1、29 頁）。
- 109) 廖慶謀等会稟、咸豊二年十二月二十日、軍機処檔 088385 号。
- 110) 陳徽言『武昌紀事』（『太平天国』4、589 頁）。民国『湖北通志』卷 71、武備志九、兵事五、粵匪。
- 111) 廖慶謀等会稟、咸豊二年十二月二十日、軍機処檔 088385 号。
- 112) 稟報武昌失陷詳細情形、咸豊二年十二月、F.O. 931 1386。
- 113) 徐広縉奏、咸豊二年十二月初九日、軍機処檔 088226 号。なおこの上奏は『清政府鎮圧太平天国檔案史料』には収められていない。
- 114) 諭内閣、咸豊二年十二月十八日『鎮圧』4、236 頁。
- 115) 廖慶謀等会稟、咸豊二年十二月二十日、軍機処檔 088385 号。
- 116) 稟報武昌失陷詳細情形、咸豊二年十二月、F.O. 931 1386。
- 117) 陳徽言『武昌紀事』（『太平天国』4、590 頁）。佚名『武昌兵燹紀略』（『太平天国』4、571 頁）。
- 118) 蕭盛遠『粵匪紀略』賊陷岳州直撲鄂城（『太平天国史料叢編簡輯』1、29 頁）。
- 119) 佚名『武昌兵燹紀略』（『太平天国』4、571 頁）。
- 120) 廖慶謀等会稟、咸豊二年十二月二十日、軍機処檔 088385 号。
- 121) 稟報武昌失陷情形、咸豊三年正月、F.O. 931 1381。
- 122) 稟報拳人吳樂清闔門盡節情由、咸豊三年四月、F.O. 931 1390。

- 123) 稟報武昌失陥情形、咸豊三年正月、F.O. 931 1381。
- 124) 陳徽言『武昌紀事』（『太平天国』4、592頁）。
- 125) 廖慶謀等会稟、咸豊二年十二月二十日、軍機処檔 088385号。また各王府が置かれた場所については陳徽言『武昌紀事』（『太平天国』4、594頁）。
- 126) 陳徽言『武昌紀事』（『太平天国』4、595頁）。また張德堅『賊情彙纂』卷12、雜載によれば、この時反論を試みたのは漢陽出身の馬姓なる生員であったという（『太平天国』3、312頁）。
- 127) 稟報武昌失陥情形、咸豊三年正月、F.O. 931 1381。
- 128) 陳徽言『武昌紀事』（『太平天国』4、593-596頁）。
- 129) 張德堅『賊情彙纂』卷10、賊糧、貢獻（『太平天国』3、270頁）。
- 130) 菊池秀明「広西における上帝会の発展と金田団營」。
- 131) 張德堅『賊情彙纂』卷10、賊糧、虜劫（『太平天国』3、271頁）。
- 132) 陳徽言『武昌紀事』（『太平天国』4、594頁）。
- 133) 張德堅『賊情彙纂』卷10、賊糧、貢獻（『太平天国』3、270頁）。
- 134) 陳徽言『武昌紀事』（『太平天国』4、594-602頁）。
- 135) 陳徽言『武昌紀事』（『太平天国』4、597頁）。勞光泰「鄂城表忠詩」（簡又文『太平天国全史』上、454頁）。
- 136) 陳徽言『武昌紀事』（『太平天国』4、597頁）。また汪埜『盾鼻隨聞録』卷2、楚寇紀略にはこの時太平軍が漢口の戲班を招いて「連日演唱」させたとある（『太平天国』4、367頁）。
- 137) 汪士鐸『乙丙日記』（並木頼壽編『新版 原典中国近代思想史』1、開国と社会変容、岩波書店、2010年、258頁）。
- 138) 何璟奏、咸豊二年十二月二十三日、軍機処檔 088384号。何璟は広東香山県人で翰林院編修。
- 139) 馮誉驥奏、咸豊二年十二月二十四日『鎮圧』4、286頁。袁希祖奏、咸豊二年十二月二十四日、同書 284頁。
- 140) 毛鴻賓奏、咸豊二年十二月二十二日『鎮圧』4、265頁。また富興阿奏、咸豊二年十二月二十二日『鎮圧』4、267頁も「徐広縉之罪実浮於賽尚阿不止倍蓰」と述べたうえで、彼と向榮を処罰するように求めている。
- 141) 徐広縉親供一、咸豊三年三月十二日『鎮圧』4、557頁。
- 142) 徐広縉奏、咸豊二年十二月十六日『鎮圧』4、229頁。
- 143) 諭内閣、咸豊二年十二月二十六日『鎮圧』4、304頁。
- 144) 軍機大臣、咸豊二年十二月二十六日『鎮圧』4、306頁。
- 145) 羅爾綱『李秀成自述原稿注』増補版、135頁。
- 146) 諭内閣、咸豊二年十一月十七日『鎮圧』4、106頁。
- 147) 琦善奏、咸豊二年十一月十九日『鎮圧』4、111頁。
- 148) 張祥河奏、咸豊二年十一月二十七日、軍機処檔 087960号。同奏、咸豊二年十二月二十七日『鎮圧』4、309頁。
- 149) 何璟奏、咸豊二年十二月二十三日、軍機処檔 088384号。また軍機大臣、咸豊二年十二月十二日『鎮圧』4、214頁は「該大臣（琦善）自上月二十七日出京、本月初五日始由保定起程、似此按轡徐行、将何日始抵豫省耶？」とあるように、その緩慢な動きを叱責している。
- 150) 琦善奏、咸豊二年十二月二十六日『宮中檔咸豊朝奏摺』6、759頁。
- 151) 常大淳奏、咸豊二年十一月十四日『鎮圧』4、95頁。
- 152) 林映棠稟、咸豊二年十一月二十三日、軍機処檔案 087060号。

- 153) 勝保奏、咸豊二年十二月初六日、軍機処檔案 087852 号。
- 154) 陸建瀛が欽差大臣に任命された当初、清朝は彼に長江上游に赴いて武昌を応援するように命じた（軍機大臣、咸豊二年十二月初三日および諭内閣、同年十二月初四日、同書 186・192 頁）。だが武昌の戦いが始まると、咸豊帝は陸建瀛に急ぎ九江へ向かい、張芾と協議して防備を固めるように指示した。また蔣文慶が安徽の兵力不足を報告すると、省城および湖北と隣接する各県の防衛を強化するように命じた（軍機大臣、咸豊二年十二月十一日、同書 211・212 頁）。
- 155) 軍機大臣、咸豊二年十二月二十八日『鎮圧』4、312 頁。
- 156) 勝保奏、咸豊二年十二月初六日、軍機処檔案 087852 号。ここで勝保は「金陵一帯爲南北咽喉、勢更重於武昌。現在賊已披猖、其注意金陵、亦必甚於他省。若僅責成該省文武等守禦、恐未足深恃。此奴才所以日夜叵維、不能自己。願我皇上速簡大員、馳往督辦、庶可弭亂於未然也」と述べている。
- 157) 軍機大臣、咸豊二年十二月二十五日『鎮圧』4、297 頁。
- 158) 向荣奏、咸豊二年十二月二十一日『宮中檔咸豊朝奏摺』6、711 頁および『向荣奏稿』卷 1（『太平天国』7、15 頁）。なおこの上奏は『鎮圧』4、257 頁にも収められているが、「百姓紛紛迎入」という部分を「百姓紛紛、匪入」と誤ったうえ、日付も十二月二十四日と誤っている。
- 159) 向荣奏、咸豊二年十二月三十日『鎮圧』4、335 頁。
- 160) 向荣奏、咸豊二年十二月二十一日『宮中檔咸豊朝奏摺』6、711 頁。
- 161) 向荣奏、咸豊二年十二月三十日『鎮圧』4、335 頁。また彼は洪秀全が漢陽に、楊秀清が武昌にいると述べたうえで、「其羅大綱、石達開往來行走、尚無定処」となるように、羅大綱と石達開が機敏な作戦活動を行っていたことを伝えている。
- 162) 王茂蔭奏、咸豊二年十二月三十日、軍機処檔案 088404 号。
- 163) 稟報武昌失陷情形、咸豊三年正月、F.O. 931 1381。
- 164) 向荣奏、咸豊二年十二月二十五日『鎮圧』4、297 頁。
- 165) 徐広縉奏、咸豊三年正月初六日『鎮圧』4、353 頁。また張亮基も湖北、湖南へ送られる予定だった軍餉 227 万両のうち、武昌で太平軍に奪われるか、いまだ送られていないために、現在湖南に残されたのは 4-5 万両に過ぎず、「現在武昌城外兵勇二月口糧即已無款支給、実有停兵待餉之意」と述べている（張亮基奏、咸豊三年正月初六日、同書 357 頁）。